地湧叢書第一編

特 114
60

我等は生者か死者か

聖活社發行

始

特114
60

活命の書

時代相は種々に變化して、際限の無い將來へと轉化して止みませんと云つて可い程、眼に見る事の出來る變化を連續けてゐます。其のフィルムの中に映されてゐる、人間史は爭鬪の歴史であると云つて居る人がある如く、不和と不安は今尙連續られて居る。けれど吾人として、何人に問ふても平和と光りとを要求しない人は一人も無いのであります。不思議にも其れが史上の方面や區域の方面から觀ますと、「人生は、爭鬪の史なり」と云ふ事に成るのです。其の爭鬪に疲勞した時に平和の要求が叫ばれるのであるか、若くわ、平和を平凡と觀じて殘害な、慘酷な、生者が殺し合ふと云ふ修羅界に墮落するのであるか。平和から爭鬪へ、?、爭鬪から平命へ?、人生としては何れが眞實の人の世であらうか。單に考へれば平和が人間の要求さ、と朝飯し前に

14.12.15
内交

云つてゐる人が在りますが、其の人が自己の過去の幾年かを熟察した時、此の詞に訂正しないではゐられないだらうと思ひます。けれども私し自身でも平和の方が好きです、血どろに成つて爭ふなんて、事は考へたくもありません。では、私が他人の全部の行爲を肯定するかと云ふに、其れは出來ない事であるとは、自分で嘲笑つてゐるのです。是は私計りではない誰れでもであると思ひますが、要するに人生は

と

平和の爲の爭鬪

爭鬪からの平和

との二路があるのみではないかと想像されるのであります。若し人情から云へば平和も爭鬪も慾望の表現に過ぎませんが、と云つて慾望を滅去したとしますと、其の處には平和も爭鬪もありません。唯だ在るべき者は慾の皮と骨計りであります。私は其れが私達の人生であるとは信じられません。矢張、人生としての理想の一分である平

和と、行爲の一分である爭鬪とをとらへて、何れが人生の目的であるかを研究しなくつてはならないと思ひます。處が或る人は云ふ、爭鬪も平和もあるから可いのだ、人生から何れを去滅しても人生は止極に達して了ふ。と悟つたらしい事を云ふ。若しさうだとしたら何にも惡人に向つて小言を云ふ必要もなければ、善人に對して讃美する必要はないのです。惡を憎み善を賞すると云ふ事は一般人の思想であると思ひます。然し善惡と云ふ事は單に人情から出る詞でない事は定つてゐますが、世人の多くは癪に觸つた事を言つたから惡人であるとした樣な事を考へてゐるが、善惡の定義はそん麼事からでなく。衣食住の交換暴利等から、衣食住の不求得の苦難を他人に及す事等、や、求めんとする者に對して害をなして、衣食住の不自由を人に及す事が惡と云ふとは、二宮尊德先生の敎へであります。佛敎から云へば四恩を知らずして不報者、並に正義に逆く者等を呼んで惡と云ふと敎へてゐます。其の惡と善、惡と惡、との中から爭鬪は生じますが、善人としても惡人としても爭鬪は有る、して見れば、爭鬪は善

と呼ぶか惡と呼ぶかは問題でありますが、私達は野獸的爭鬪の世界を去つて、人間的世界の眞の平命の實在を認めて、其の平和の園に生を養なはなければ成なないと思ひます。平和と云ふ事は人生の理想ではなく宗教ではなく、平凡な私達として欣求し實現させなければなりません、と、思ひますが。然し爭鬪から爭鬪へと生きながらへて來た人間が、眞の平和を求めるには、何したら可いか、と、云ふ事を先きに考察をして戴く事が出來たら、今私が申上んとする事を知つて戴く事か出來るだらうと思ひます。そうして私の此の書籍を書く心持を認めて下さる事が出來る事と信じます。

第一章

生きた平和と光りとを來め樣とする心狀を指して、私は宗教心、若くば、信仰心と呼びたいと思ひます。若し人として平和と光明とを要求しない人が有つたとしたら其の人は、人非人であると思ひます。佛敎から云へば、光明を求めると云ふのは天界以上の人を指してゐる、又平和を求め樣と云ふのは人界以上の人の心情である、けれども人界線以下の人爭ふ事、色食の暴求、衣食住の要求の横暴、呪いの人生、等の血どろな世界に彷徨てゐる惡魔人と云つてゐるのである。人らしき人としては平和と光明とを追求して精進の行求を連續けなければならない。私は今此の處では餘計なこつぱ理窟は書きたくない、理窟などはどうにでもなる者だから、それよりは、現世の誰れの眼にも見える、人生をして考へて見たいと思ふのであります。誰れでも現世の社會が良好な社會であり、人生の完成された理想化した世界であり、國家であり

社會であるとは信じられないだらうと思ふ。いたる處でやれ革命の、改造の、と血腥い叫びの聲へてゐる現在はどうして理想的な人の世界と云へ樣か、彼等の叫び連續けてゐる革命なり改造はそれは一種の感情から表現された、政策に過ぎない、人生と云ふ者はそん麼生ま優しい事で平和なり光明なり、を、認める事は出來ない、過去幾年の昔し、聖人なり神の子なり佛なりと云ふ理想人が現れて叫んだ言葉の元に服從し信伏してゐる人間は地上に大半以上であるが、一神教的、他の信仰なり信教の入國を許るさない歐洲でさえも五ケ年の爭鬪は又のない大爭鬪であつたではありませんか、それに理窟計りで信仰のない國々に於ては爭鬪のたへないのは當然の事である。其れのみか現在の日本は佛教國であり神國であり、キリスト教に於ても世界信情の線上に達してゐると歌はれてゐる日本は信仰の國である、其の日本の國内にでさえも判然とは見えないが爭鬪のたえまがない。武器こそは持たないが心及の火花は道路に店頭に車内に、家庭にと煌々してゐるのである、其の火花は一つの呪ひと成つて正直者と正

義愛好者とをどし〳〵と倒してゐるではありませんか。昔は邪は正に勝ずとか云ひましたが、現在では反對に正は邪に勝ずと云ひ度い程、正義が隱沒してゐるのであります。佛敎から云へば五濁惡世と云つて正法が隱沒して世に爭鬪が充滿する時と云つてあります、現在はそれでありまして、地上に五つの顚倒が生じて、人間としての本性を失ひ本體を失つて了ふ頃の世上の有樣を說かれてゐる。

第一は劫濁と云つて濁つた時世と云ふ事であります、今の社會相は正に時世の濁つた時である。日蓮上人が四恩鈔の中に第四の恩報と云ふ章に於て、

四には三寶の恩、釋迦如來に無量劫の間だ菩薩の行を立て給ひし時、一切の福德を集て六十四分と成して功德を身に得給へり。

其の一分をば我身に用ひ給ふ、今六十三分をば此の世界に留め置て。

1　五濁雜亂の時、

2　非法盛ならん時、

3　法謗の者國に充滿せん時、
4　無量の守護の善神も法味を嘗ずして威光勢力減ぜん時、
5　日月光を失ひ天龍雨をくださず、地神地味を減ぜん時、
6　草木の根、莖、枝、葉、華、果、藥、等の七味も失せん時、
7　十善の國王も貧、瞋、癡、を增し父母六親に孝せず。したしからざらん時、
8　我が弟子無智無戒にして髮ばかりを剃て守護神にも捨てられて、活命の計りごと無からん、比丘比丘尼の命のさゝへとせんと誓ひ給へり。

と心地觀經を引いて說いてゐますが、現在は以上の八ケ條に該當してはゐないだらうか、時の濁とは、以上の如き有樣の世上を指したのである。此の五濁雜亂の時と云ふのは(1)より(8)迄での如き社會相である。「時」と云つたのは劫濁を指した者で、劫濁の中に、

二、見濁、三、煩惱濁、四、衆生濁、五、命濁。と云つて四つの大變動の生ずる

時を劫の濁りと云ふのであります。此の四變動が劫濁の中に含在してゐるのである。

第二の見濁と云ふ事は、辭典的に云へば、何見とか、見數とか六十二見とか云ふ面倒な見知觀がありますが、要するに互に物の見方に親切と深察とが無くなるのである。譬へば、親が子供に小言を云ふ場合、小供は親の小言を深く考へないで、言はれた事が癪に觸る、と云つて、親を怨むなどが、見濁のそれである。若は、或る人が物を作つたとする、其の作品の美點のみを取つて價値を與へるとか、批評するとかするが、實は其の作品の內容に含まれた作者の苦心には同情しない、其れも見濁のそれである。孔子の九思一言の金言の如きは見濁を喝破した千古の言である。現在の人々は何に對しても自分の感情に的しない事であれば、「彼は惡なり」と云つて了ふ事に勤めてゐる、が、何故に彼は惡になりしか、其の內容には如何なる事情ありやと調べて見れば、其の處には、見るも汚らはしい醜態が潛むでゐて彼をして惡人ならしめた、と、云ふ事が明白になる、其うなると彼の人生には同情すべきではないか。彼をして

悪人なりと云つて戒る前に、斯くした同情を以つて戒めた場合、其の戒めの詞及行爲の中にはどの位い親しみが含まれてゐるだらう、讀者よ、三食が常に食せる人間に一食を與へて彼はどの位ひ喜ぶであらうか、それに反する三食が常に食し得る事の出來ぬ、貧しき者に半食與へたとしたら、彼の喜びは何位であるだらうか。親しみのある小言は涙の中に染々と感じられる。それ表面計りや一時的の場合の失作等に依つて彼を悪人呼わりするなどは、何等が悪人だか分らない。現代の樣に外觀さえ美しければ、人格者、とか資産家とか思つて待遇をするが、それが爲に萬引や詐欺、等にひつかゝつて騒いでゐる人間が増々多くなる。其な罠にしつかゝる奴が一歩上手の悪人だからだ。小欲に祟りなしと云ふ金言もある、一躍千金の金を握つて若隱居でもしやうと云ふ樣な卑去者が、結極大失敗をするのであります。其れと云ふのが人生は金を得て樂しめと云ふ事、又わ、人生は金なり。金なくして人生の樂しみやある。彌陀の光りも金しだい。金は社會の人格の素。などと云ふ愁しい叫びが眞理の樣に信

じ切つて居る人の多い現在は、實に現滅の叫びである、金よりも尊い人の生命、を知らない、否それは無理ではない、人の命をも現在は金で自由になるからだらうが、百萬の金を積金で置いて中で自殺して、其の金が彼に眞の安眠を與へるであらうか。與へない事は誰れも知る處である、生て居ればこそ金も光り有りだ。衣食住を交換すべき、金の爲に得難生命を滅し、それが爲に人を呪ひ、人を惱し人を苦しめる、等、其れと云ふのが金と人間の生命との價値を主客顚倒して見るからである。自己の欲望から全てを觀るから、自己の穢ない欲望の通りに人が見える、譬へば赤い眼鏡を掛けて見ると全てが赤く見える樣に、自分が喧嘩好だと人の言ふ詞が常に喧嘩をふつかけてゐる樣に感じられる者である、何にを考へるにしても自分を中心に考へると云ふのが邪見であり見濁の相である。若い者には老人の思は分らないと同時に、女には男の心が理解が出來ない、男に對女もそうだ。それを知らうとするには先ず我見を離れて見る事が必要であるが、濁世と云ふ時代には我見を離れやうとする境がないのであり

ます。其の見濁は何にから生ずるかと云ふと、
第三の煩惱濁と云ふのが見濁を生ずる原因であります。煩惱と云ふ事は煩ひ惱むと云ふ事で煩惱にも三煩惱、五煩惱、十煩惱、八十八煩惱、百八煩惱、八萬四千煩惱、とありますが、歸する處は貪欲、瞋恚、愚痴、の三つが根本をなしてゐるのでありますが、此の三の玄因は何んにあるかと云ふと、即ち人間としての八苦にある、

一は生れるの苦惱……生苦
二は老いるの苦惱……住苦
三は病めるの苦惱……異苦
四は死の苦惱……滅苦
五は愛する者に離別する苦惱……無常苦
六は怨み憎しみに會の苦惱……爭鬪苦
七は要求するものゝ得難の苦惱……生活苦

八は體質、受入、思想、行爲、覺識、等の五陰から生ずる盛氣、自己靈力の弱き時には壓する事が出きずに惱み苦惱する。己性苦
等の以上から生じて來る、欲求を過激的に若くば一時的に受納しやうとする處から生ずる煩らいである、それを漸進的に求め樣とするにはあまりの長時間に惱みを生ずると云ふのが煩惱の原因である。之は惱みの多い人間は妥協性と忍辱心と靜進思想とのない人間であります。ほとゝぎすの三歌でも成功者の何んたるは分る事ですが、殺して了ふ。鳴してみしよう。鳴く迄で待たうと云つた第三は德川家康を歌つた者であるが、德川が十五代は鳴く迄で待たうの忍辱があつたからである。兎に角急進的な者は安易な生活の日が少くないと云ふ事は明白な者である。けれども今一つ大事な事がある、それは何ら忍らえて居ても食ふと食えないの問題に成つて來たら、其な事を云つてゐられない、即ち生るの惱、生存の惱、生活の惱、などの以上の八苦が押しよせて來たとしたら、他人もなにもあつた者でない。自己及家族の者の生死の何如に關す

るのであるから、其の塲を切り拔けなければならない。其の惱み。其れが爲には邪見な事だとは思ひ知りながらも他人の求めない内に自己の物にしなければならず、他人を倒しても自己の安定を求めなければならない、それでなければ自分及家族の者が餓死するか、自殺をしなければならない。處が其麽思想の者や、考へてゐる者は自分一人ではない、社會全人が同じ考へで居るのだから其の處から生ずる者は人を倒す手段か不正義な事か、爭鬪より外に生じないのである。斯麽處から自己が生る爲に他人を輕視する樣になる、正義などを保守してゐては結局自殺の運命に達するより道はないのであります。不正義である事を知りながらどしどしと實行したり、新聞廣告を利用して詐欺を働いたり、地位も名譽も忘れ、地位名譽を利用して病者の血を絞り、迷へる者に謎をかけたり、弱者の汗の中から遊行金を絞り出さうとするとんだ人非人が、世に充ちて來る、(2)(3)の如き非法盛ならん時、法謗の者國に充滿せん時。即ち、周圍に不正義な事が充る事を云ひ、正義に判逆する者が多くなる時、正しい見解は失

しなはれて、人を見たら盜人と思はなければならなくなる、時、是の社會相を指して

第四の衆生濁、と云ふのであります。獸類鳥類魚類と食植物と見解を含濁して肉を食するに何んの考へも持たず食する無慈悲の世とは現世である、甚しい人非人の詞の中には動物は人間の食物である、と、云つておさまりかへつてゐる奴もある世の中です。私は食しては可けないなどと法然上人や念佛宗のやうな事を云ふのではありません、が、昨日迄生きてゐた者を今日は打ち殺して鍋に入れて慘酷にもむしやむしやと食つて、それでのろけてゐては犧牲者に對してあまり無慈悲ではないかと云ふのである。なに食はれて成佛するのだと云ふ馬鹿な僞一休がある、けれども貧つた奴が地獄に落れば、食はれた奴も地獄に落ちる事は當然の理ではないか、他動物に對して感謝もなければ愛も人情も慈悲もないのが、延びると同類に對しても犧牲者に對しても野獸と同觀する樣に成るのである。其うなれば人肉の市塲も出來、肉體美の看板も出來る樣に成る、人命が安くなると老體醜體は捨處がなくなつて來る、現在がそれ

である。

皺へ粉白をねり込まして若く作ると云ふ、體にまで僞飾をする樣に成る、それが出來ない者は侮辱をすると云ふ樣な有り樣であります。其れは市場へ出品をする品物の手入に過ぎないのであります。一方又親などは信用しなくなり、こんな苦しい世界に生れたのは、親が惡いのだと云つて、生れざりせば、と云つて親を呪ひ、結婚者を輕笑して、獸的婚因を求めて戀愛のどうのと云つてゐる薄ぺらな雜誌學生の多い現代の有り樣を知らない人はありますまい。天錢文士に煽動されて飛ばされて居る青年の悲しさを、慈愛られよ。

正義に謗くやからは、一歩たち入つて考へて見ますと、實は彼等が、敎師等から敎へられた事が既に不正義な事が多いと云ふ事に氣付いたのが大原因をなしてゐるのです、と、云つて彼等自身で、實の眞理、正義とは何麽者かと云ふ事を研究する餘地がないのでありましよう。今日迄で正義正義とうたはれて來た詞の中から、見るも汚ら

はしい不義不正な醜態が潜んでゐるのであります。其處で眞理なり正義なりと云ふ事は、自己自身で考へ出して自分の生命の保證の出來る事柄が正義であり眞理であると考へて、正義に歸せよ、と叫んで廻るのであります。是れを佛敎では謗法と云ひまして、全人類及生物の生存及生活を保證する法に逆いて自己一人の爲の生存なり生活の保證を主張する者を、謗法の者と呼んでゐます。國家と云ふ者は多くの人に依つて組織されてゐる事は私が云はなくとも誰れでも知つてゐるのです。多くの人に依つて組織されてゐるのであつたら、全人類の生存なり生活の保碍は國家の全部が保守しなければならないのです。私は此な事は誰れでも知つてゐる事ですから云ひたくありません。が、謗法の者國に充滿せん時には、全人類の心情から上を敬ひ、下を愛すると云ふ人間宗旨がなくなつて生存を呪ふ樣になり、子を連れて團體自殺をする樣な人の心理を想像すると、實に悲慘な局なのであります。生を呪ふ樣になりますと祖先を敬ひ崇する事は止めるに定つてゐる、遠古の祖先即ち神樣や佛樣を崇敬しなくなる。

神は非禮を受け給はず、
正直の頭に、神宿る、

正義の心を神の食事と云ふ、

などの金言は失なはれて、過去幾萬の靈は亡びて威光も勢力も失なはれて了ふ。即ち、(4)の無量の守護の善神も法味を嘗ずして威光勢力減ぜん時、(5)の不淨が地上に表現するのである、(立正安國論參考)其の理由は人間の知つて居る學問では到底分る者ではないのです、(5)(6)の問題は不作及作物不味などを云つた者であります。

次に十善の國王とあるのは、十善戒を守つて國王に生れると云ふ意味から、十善の國王と云つたのでありましやうが、五濁雜亂の時には國王が國民及親族等に對して愛もなければ人情もない、したしからざらん、即ち親しみのない國王が生ずると云ふのであります。隨つて其の時代には佛弟子即ち僧侶達は頭の髮計りを剃つて、佛法を習はなければ、奉行もせず、他人えも弘めないから生きて行く事が出來ない、仕方がな

いからお經の切賣り、死人の番人、迷者の地藏、と云つた樣な者で姿こそは弱々しいおとなしいが心内には、何んとかして金が得られないかしら、とウの目タカの目になつて神に捨られる時、を指して衆生濁 となる惡世、人の死がなんとも思えない、死人を取り扱ふ營業者、僧侶、醫者、葬儀や等は死人などに對して悲しんでゐたら營業が出來ない。若し憐み悲しむ、僧侶なり醫者があつたとするか、其の醫者は名醫であり名僧である事は確實な者んだ。現在は上下左右を觀るに以上の八ケ條に該當しない事はないのであります、此の八ケ條の雜亂は結局吾人お互が生命を短縮するのであります、現在に肺病患者、神經衰弱、貧血病者、等、即ち文化病の多くなつて來たのは、生活苦の中から生れて來た子供、其の子供も又親と共生する者であるから、同じ樣な惱に罹さられて、苦しむ、結局は生命を短かにして了ふのであります、即ち自己自からが、自分の命を食つてゐるのです、昔は親の脛を嚙つたが、今は自己の命を喰ふの時、佛敎から云へば、我れを食ふ心、即ち餓鬼と云ふ事であります。

餓鬼亂行の世界とは現代の相性を指した者であると思ひます。

此な社會に生きて行かなければならないのかと思ふと、人生の現滅が胸元に込上て來るのであります。此の爭鬪と暗黑の世界に平和と光明とを求め樣とするのは、ある意味から云へば馬鹿かも知れませんが。私達だけが死んだにしても、未だ人の世は盡きる者ではないのです、して見たら、將來の子供達の爲に根本からして此の暗みに光明を點じ、爭鬪を打消して平和を呼ばなければなりません。然しそれをするには どうしたら出來るか、が、問題の問題です、けれども現代の有樣を痛切に感じた人で なければ其の問題を徹底的に考へ樣とはしないかも知れませんが、私はその問題を宗教の方面に求めました。が、皆さんに知つて戴く事が出來るかどうか、章を換へて申して見ましやう。

第二章

人間として、古い昔から人は萬物の靈長と勝手に定めて、勝手に進んで來た、然れども今になつて考へると形ちが他動物より都合好く出來てゐると云ふ事と、氣儘に物を作つて生ると云ふ事に對して自由に近い事をすると云ふだけで。根から靈長とは云ひ兼る場合が多くなつて來た。生る爲には犬や鳥と同じ樣な行爲をする者が多くなつた樣である、此の濁惡の時代を、嗚呼、法末だ、白法隱沒の時代だと云つて、靜まして居る事は出來ない、何にか時代に的當した方法を持て、全人類の生活の安定を求めなければならないと思ひます。

一人の安土を願はんと欲せば、先づ國土の安隱を祈るべし。

とは日蓮上人の敎訓であります、自己一人のみの安易が何んの用をなすのでしやう眞實に吾人としての生活の保障は國家の全部に求めなければなりません、と云つて我

國のみ幸福の天地に在つたとして全世界が不幸の境遇にあらば、我國民のみ甘露をすうてゐる事は世界道德がそれは許さない。して見れば、一人の安易な生活、生存を求め樣とするには全世界が同じ幸福の立場に在らなければ駄目と云ふ事に成ります。他人の事はどうでも可い我一人幸福であればそれで可いと云ふ樣な化物は話にはならないが、生きた幸福と云ふのは肉的にも精神的にも嫌な感じのない生活でなければなりません。他人の正義を犧牲にして財產を作り資產を豐富にしたとて、其れが幸福であり生活の安定であるとは云へない。生活の安定と云ふ事は、生活に對して不安のない事であることは誰れでも知る處でしやう。それにしても現代の樣に喰はなければならないと云ふ哀れな叫びが四方に、響ひてゐる樣な、馬鹿氣た時代には、生きんが爲に狂亂の狀態にあるのです。即ち餓鬼充滿の時代とは現在を呼んだ詞でしやう。是れを佛敎から見ると人間生活のどん底であります。他人を喰ふ時はまだ可い時代ですが、自分を喰ふ時代、此の時代は人の世の全滅の時である。何故かと云ふに、自尊心も自

重心も自保心も自治心も失なはれて、一時厭れの生活を辿るからであります。さうした生活者の頭には道德もなければ人情もない、自分は弱い人間であると云ふ自覺の反響が、慘酷な事をするのであります。斯うした時代の爲に釋迦は佛法と云ふ敎へを說かれたのであります。人として人格を失ひ、萬物の靈長たる價値を失ひ。人は罪の結晶であり、此の地上は石瓦の世界であると云ふ誤信的迷信者が多く、地上の生活を呪ふ、と同時に人の生命を保證する者は即ち金なりと誤謬してゐる人との二人が地上の光明を失なはんとするのであります。此の處に於て私達は考へる。

生命の保證は金に非ずして、相互の努力に依つて產み出される、生活費及物品、等に依らなければならないと思ひます、即ち相互扶助。であります、然れども單に是れだけでは通じない。

一に相互崇拜、二に相互敎授、三に全能的行動、が加味しなければ眞の相互扶助は實現する者ではありません。是の事は（大阪市西區

新町通り二丁目の立正や書房から發賣された拙著の巖頭の叫び、)に明了を書いて置きましたから一度御參考して戴きたい。

現代の樣に信仰を失なはれた時は、實に恐るべきであると思ひます、甚だしい人になると他人を信じないのは未だ可いが、自分が自分でさえ信じてゐない人が少くなくないのでありますす、私は他人は信じられないにしても自分位いは信じたいと思つてゐますす、否な私は私に對しては確實なる强い信仰を持つてゐます。然れども中には此の地上に生活をしてゐると云ふ事に付いて、自信さえもないと云ふ人がありますが、實に其麼人は可哀想に感じられてなりません。が、信ずると云ふ事を失なはせる樣な時代相は憎む可きだと思ひます。では全然信仰心がないかと云ふと、さうではなく、信仰心が墮落したと見る方が可い見方ではないかと思ひます。何者、信仰心が地上の生者から去つたとしたら、地上には棲息が出來ないからです。懷疑主義者や、哲學の生知り者が生を呪ひ、死を求め樣とする樣に成つて了ひます。一般の人に信仰心なる

者を訊問しますと、それは〳〵淺薄な詞を持て答へてゐます、其の答へが學者になればば成る程薄ペラな返事をする、其の薄ペラな辭典學者の智識なり思想なりに依つて、教化されて居る現代は悲れむべしではありますまいか。たま〳〵信仰なり信念の有り想な人に遇つて訊問すれば、稲荷さげとか、天國行きとか極樂行などを信じて、自から罪人を名乘て弱い人間に成て了つてゐる。其れが爲に萬苦を冐して鬪かをとはしないで、厭世のみを考へて、一日も早く地上を去らうと心掛けてゐる、けれども生の愛着はおめ〳〵と其れは許るさない。

生きんとすれば、活命の惱み。

死なんとすれば、解脫の惱み。

の二苦に囚はれて生きるに生きれず、死ぬに死に切れず進退きわまつて神經病に罹る者が多くなつた、彼等をして喜ばさんとするには、感激の强い者、即ち生まぬるい話しや、行爲や、見物では喜ばない、だから過激的な極端なものでなければ駄目であ

る、肉美的な事か醜態的な事か、血どろな事でなければ感激が生じないのです。ですから、現代思想を受けた人々は意識を失ふ様な強い酒を飲むか、戀愛の極に醉ふか、自己の權力を滅茶苦茶に振り廻すか。しなければ生きてゐる様な氣分にならないと云ふのである。酒を飲むには金がない、戀愛に醉には道德が邪魔だ、自權を振ふには他人を奴隷視しなければならない。と云ふ以上の三ケ條が科學萬能、金光禮拜、迷信打破既成宗教の罵詈、信仰嘲弄、神佛輕視、善惡同觀、道德無視、等の詞を幷べて、現代人とか新らしいとか云つてゐるが、若しさうした事が人生であるとしたら、文字教養なき原始時代が、新らしい時代と云はなければならない。其の新らしい時代が何んの必用を感じ認めて現代迄で進化し進歩して來たのであらうか。先ず新らしがりやの神經病者に是れを問のである。精神生活を無視した生活は持續すると云ふ事は認められない。人の生活には是が非でも精神生活が根據をなさなければならないと云ふ事を、私は信ずる者の一人であります、と云つて現代の文化生活なる者を否定をする者では

ない、寧ろ肯定をする者でありますが、根據なき文化生活は飽迄も否定を致すのであります。人生のなんたるをも考へず、自己の思想を中心にのみ生き様とする人々の生活方法には肯定は出來ない、なぜかと云ふに、其の人には可いだらうが、他の者こそ迷惑であるからだ。他人の迷惑を反り省ない生活者、即ち無顧者の生活をどうして可い生活だと云へましやうか。世界は共生であります。

一人の生存は、萬人の生活であり、
萬人の生存は、一人の生活である、
からです。共生思想を失はれた時は、人の肉を喰ふ時代、即ち人の肉を汗から血から、精力から、ぢり〳〵と肉を絞り取る。取られる者は精力、努力、活力、等は失なはれて、勞働が出來なくなる、其の死骸を大都市の橋の下に、驛に公園に捨る時代、是れを佛敎ではアカニダ生活と云ふ、即ち人の正義や生血を喰して生きてゐる形姿の黑い木像や畫に見る邪神の像である、黑きは地獄の相とは龍樹菩薩の大論九の卷の說

明する處である。中產階級以上の者が、アカニダ生活に成つた場合、黑き姿から放す光線は矢張り黑い、其の黑光が、地上に黑幕を布くのである。思想が惡化した、と叫ぶ人があるが、結局それは不良老年の仕業である。不良少年青年を狩る前に不良老年を狩らなければならない。處が狩る人が不良老年の一人であつたとしたら仕方がない是れは餘計な事だが、實に現代の人心程惡氣化して居る事は無いだらうと思ふ。此の暗黑の時代にこそ宗敎は必用でなければならない。釋迦は斯麽事を云つてゐる、

或る醫者の子供が父の留宅に他の毒藥を飲んで苦悶してゐた、父は歸つて其の樣を見て、あらゆる藥草から眞實の藥を擡篋和合して子に與へて服さした。けれども毒藥の量を多く飲むだ子供程、又飲んだら苦るしい、此の上苦るしかつたら死なければならないと云つて、救つては貰らいたひが藥を飲むのが苦痛だと云つて飲まない子供がある、其の子よりも多量に飲んだ子供は精神が顚倒して善も惡も明らず、父か他人かそれさえも明らないで悶えてゐる。しく〳〵腹の痛む位の子供は父の詞

に從つて藥を早く飲んだから直ぐに痛みは去つて了つた。然れども親として飲まないから勝手に悶えてゐろと云ふ事は出來ないから、方便を持て其の藥を飲ます事にした。

と云ふ事が法華經第十六の醫王の譬へに說いてある、現代はそれである。少しく生活に覺醒した人には、信仰心が兆して來てゐる、けれども元來の宗敎的信仰に捕捉れるのはあまりに弱すぎる、と云つて何者かに依らなければ活命を計る事が出來ない、と云ふ。紳士風と非人格の觀念にさえぎられて、既成宗敎を信ずる事が出來ないで、宗敎の門前に彷徨てゐる決斷力と自覺心の乏しい者を、時折り見受る樣になつた。此麽人は宗敎に入門するには未だ苦悶が不足してゐるのである。そうでなければ、人生を輕視してゐるか、向上心のない人であると思います。然れども一歩退りぞいて見ると無理でない處がある。たま〳〵醒めて眞實の幸福へと足を運ばんとする人達の瞳には、矢張りぴか〳〵輝いてゐる木像や佛具にのみ視線は流れるに違ひない、其の處に

は大きな恐ろしい網が天井から降され様としてゐる、其れのみが見えるからである。其れを又宗教家側では見せ付てゐる、と云ふよりも寧ろ看板にしてゐるのであります。それは宗教家其の者も人間であるからだと云ふ僧侶があるが。

釋迦の出世の振る舞は人間の振舞にて　候也

と日蓮上人は云つてゐます、釋迦牟尼程の觀念のない日本の僧侶では話しにはなりませんが、日蓮上人は日本人である、兩親の人情に依つて產れて來た人間であります其の人が、佛的觀念なり宗教的信仰を釋迦の心念迄で延長さした、尙それよりも釋迦の理想人たる上行菩薩迄で進化して、尙ほ不足ずして、久遠の生命に達すべく、全的信念の活動は、ついに妙法蓮華經如來の地位を得て、第二期即ち佐渡流在後に於ては、妙法蓮華經如來の大活動に延長されてゐる。其の人即ち魚業の小息であつた、信念は岩をつら貫、天よりも高く地よりも厚しとは此の事であらうか。生きんとする私達は偏さない宗教、包擁の信仰、現在及未來並に過去に通じた普遍的な生きた宗旨を

定めると云ふ事が、生活の根據と成らなければならない。此の根據を定める時、萬物を超越し、不滅の信念が判然と認識されるのであります。此の不滅の信念こそ、大苦に滿ちる人生を樂化し、社會の萬難を打破して、全生者の大理想を實現さすべき石礎である。

第三章

私は第二章迄で述べて來て、此の章に於て宗教としての常識を少し思えてみたいと思ひます、皆さんの知つてゐる宗教としての常識はどんな者であるか、試る必要があるだらうと信じます。然し斯麽生意氣な事を云つても恐らないで下さい。私は生意氣や教師側から云ふのではありません。があまり社會人の多くは宗教に對して其の判斷があまりに輕卒である事は事實です、宗教信者其の者でさえも可也薄ペラに考へてゐる人が多い、譬へば、南無阿彌陀佛と唱へてゐる人があつたと致しますか、其時彌陀如來が現れて、汝の命は唯今持つて西方へ行くと云ひながら、長い刄を彼の前に出したとして、彼は日頃の願ひ今こそ成就の時來り、南無阿彌陀佛々々々と唱へながら命ちの終るを歡喜して、彌陀來迎を喜ぶであらうか。是れは彌陀信者計りでなく、南無々々々と唱へる以上は、其れを歡喜しなければならない、けれども南無と唱へたから

と云つて自分の身を信依した譯ではない、唯だ利益を貰らつて幸福を得やうと思つてゐるのであつて、何にも此の體を佛に遺てたまる者かと、云ふだらう。けれども南無と云ふ以上は、此の身をどうされ樣と文句は云へない。何故と云ふに南無とは命を何々樣に歸依すると云ふ事でありますからです。けれどそん麽考へで神佛の前に跪ずいたり合掌をする者はありますまい、昔しは朝に道は開いて夕に死するも可也、と云つた事があつたから南無と云ふ樣な詞が尊稱の冠詞となつたのであらうが。神佛に對する信仰なる者は南無即ち歸命の觀念なくしては云へる者ではありません。それを何んぞや利益を神佛から得樣と云ふのは、絕對信仰心が主客の顚倒をしてゐるのであります。處が信者の多くに此の話をすると大概の信者は、悲しげな色を見せる者もあれば中に宗教知識の無い者は怒つて了ふ、其の反對の我利的信者と來たら、利益のない神佛を何故に祭つたり禮拜したり信ずる者かと云ふ、云ば利益を得たいから神佛を拜すと云ふのが、一般人の神佛に對する觀念に近い樣に私としては信じてゐます、中には

神佛の利益を過去に認めて、あまりの遵さに崇拜してゐる者もあるだらうと云ふ事は信じてゐるのですが、文化の先進國と呼ばれてゐる英米獨等の大國の國民でさえ今尙其の信仰に愛著をしてゐるではありませんか、東洋では其麼信仰が宗教としての信仰でない事を三千年の昔しに說破して、我國では六百餘年の昔し、日蓮上人に依つて、其れは亡國思想である事を喝破されてゐるではありませんか。其の人の御あとを辿る現代の日宗の徒の信仰の樣を思ひますと、焉ぞ知らん現代の有り樣、彼等が我祖に對して向ける顏かないのではありますまいか。我祖日蓮上人へ對して少しは反省する必要の有る事を痛切に感じます。

是な愚痴は次にして、利益が得られないのなら信仰などする必要がないと信じてゐる人の爲に一言添へなければなりません、元來神佛なる者は、見えずして利益を與へる者ではありません。利益と云ふのは宗敎學上の言を持つて云へば、救濟とか濟度とか云ふ事に成りまして、現在にある場合は救濟でありますが、若し現在及未來過去

等に渡つての救濟は靈的になりますから濟度と呼んでゐますが。是れを民族的に云へば利益と云ひます。此の利益なる者は見えざる神佛が直接に下さるかと云ふにさうではなく、幾千年前から下されて居るのですが、利益を得る信仰の手があまりに短いが爲に平等に得る事が出來ないのです。では信仰心さえあらば得る事が出來るかと云ふに、唯だ信仰心では用をなさないのであります。何を信じ迎へるかと云ふに、此の處に二つの道があります、即ち正信と邪信であります。けれども私の云ふ邪信は俗に云ふ迷信とは意味が全然異なつてゐますから、知つて置いて下さい。

では正信と邪信とは恁麼なものかと云ふに邪信と云ふのは、道理に叶はない事を信じる事であります、道理に的はないと云へば、横道なる信仰かと云ふにそれは迷信に族する者で邪信ではありません、邪信と云ふのは、いくら信じても其の功のない事であります、正信なれば、其の塲で利益があります、其の塲で利益のないのは即ち邪信であると云つて可いと思ひます、日蓮上人が良觀の雨祈りを責めた事などを思ひ

出せば、日蓮は云ふ、

二十一日間も祈つても雨降らず、汗のみ降らす、結局は逆風吹いて鎌倉を騒がす、

と云つてゐる、蓮師は一時に於て雨を降した、事もありますが、正邪の審きは實現に依るの外はないのです。が、現代の宗教信者も無信者も其の生活に對する苦痛は平等である、否それよりも生々信仰心のある者は其の惱を神佛に訴へ様としてゐるではありませんか、反對に無信仰者は、時代が不景氣なのだから仕方がない、此な時には持久戰にかぎると云つてばた〳〵しない。生路のどん底に於ては信仰のない者の方が強い力を持つてゐるのを見受けます。けれども其の力が死の終局迄で維持が出來るかどうかは問題ですが。或の程度迄では確實に小さな信仰心を持つてゐる者よりは覺心の強い事は事實であります。免角宗教を信ずる人はあらゆる人間苦を冒して來てゐる人が多いから、人生と云ふ者には恐怖心を抱いてゐる人が多い様です。それですから從つて生存の爲に神なり佛なりから力を借り様とする、即さ加持祈禱を信頼するので

あります。處が加持祈禱は宗教の生命ですが社會の多くの人に知られてゐる加持祈禱と云ふ事は根本からして矛盾してゐるのであります。加持と云ふ事は讀んで文字の如く、加へ持つ即ち或る方法を把持する事でありまして。祈禱と云ふのは肉的靈的には其の生命を量ると云ふ事であります、言ひ換へますと、自分の力ではどうしても人生の荒浪は越へ難ひと、目覺した場合、或る何々流とか云ふ、泳術を習つて、其の術と自己の力とか加へて荒浪を乗り切ると云ふのが、加持祈禱の本分であります。ですから病氣等も一つの惱みですから加持祈禱も必要ですが、病人の枕元で修顯者が大聲で祈ると云ふのは、病人の精神を顚倒させるか、沒してゐる精神を心強くさせるに過ぎませんが。と云つて讀經をして治る病氣は十種類ありますから治らないとは云へませんが、其の十種類の病氣は矢鱈につく者ではありません。「拙著『佛教入門者の爲に』を御覽下さい」。加持祈禱と云ふ事は感應道交と云つて宗教の利益でありますから、取り去る事は出來ません、と云つて加持祈禱を商賣にしてそれを宗教と云ふ事は全然許

るす事は出來ません、何者、加持祈禱なる者は信念の如何にある事ですから。宗教、宗教家其の者の力ではありません即ち願者の信念にある事です。けれどもでは誰れが祈禱しても同じ事かと云ふに、三力相應と云つて、一は神佛と法、二に信者の信念三に施術者の信念と自覺にあるのです、此の三つさえ具足すれば誰れがやつても同じ利益は得られます。必ず生命さえあれば病氣は治しますが。恐るべきは人は欲望の結晶である以上は、どうしても一度其のあじを感じますと、止める事が出來ない。其れが爲に加持祈禱のみを專門に施る人が出來て、圖々しくも玄關へ大きな祈禱の看板を掛けて、生活する人が多くなつて來る。一方又神社佛閣を禮拜して歩み廻るのが信仰だと思つて、月參り、日參り、時參り、お籠り、等やつて家を空け、家業を止む人などがある樣になる。其れを又信仰者であると云つてゐる人もあります。又一方には宗教と政治、宗教と哲學、宗教と何學と云つた樣な事を問違ひて、理論に計り徒つて信仰のなんたるを知らずして、神佛を理論で創造しやうとしてゐる。云ば行に徒り學に

徒つて、行學二道を辿らうとはしない。日蓮は云ふ、

各々日蓮の如く正理を修行し給へ。

行學二道はなれて佛法あるべからず。

と教へてゐます、けれども行學即ち修行と修養を併行しなければ可けないと云ふのであります。修養は經教に族し、修行は神佛に類するのでありますから。修行としての參拜、荒行、讀經、等のみを行じて修養としての學びを忘れた時は、人形に向つて禮拜してゐる樣な者である、即ち偶像信者と云はれても仕方がありません。と云つて修行を忘れて理論的信仰のみに入つたとしたら、それは幽靈を信じてゐる樣な者であります、やはり正信と云ふ事は、そんな不具的信仰でなく、靈肉具足した、生きた信仰でなければ、正しい信仰であるとは云へません。佛の利益と云ふ者は教へ其者が私達に下された利益の因なのであります。其の教へを信じて修行する時には、佛の考へた通りの利益が私達の前に運ばれるのであります。けれども神佛は教法を下され

て利益を下げる、私達は教法を行學して利益を得るのでありまして、教法を外にして利益を神佛の像なり書なり觀念なりから得樣としても其れは得る事が出來ないのであります。日本の古い詞から云ひましても正直の頭に神宿る。心だに誠の道を守りなば祈らずとも神は護らん。と歌はれてゐます、正の道を守らないで利益を祈らんとする人がありますが、それで利益があつたとしたら、其の神は邪神か惡魔ではありますまいか。神は非禮を受け給はず、でありまして、どうして邪義に利益を與へるでしやうか。正義の元に神ありですから、正義、と云ふも正直と云ふも一つ道理でありましやう。正義明法を眞直に辿る者こそ正直な者と云はなければなりません。其の人間になければ神佛は眞實の利益を與へないのである。處で其の利益とはなんであるかと云ふ事を考へなければなりません。

誰れも利益と云へば、病氣が癒るか、金が儲かるか、を云ふでしやうが、それは一部の利益であつて全部の不動不朽の利益ではありません。眞實なる佛の大慈大悲は私

達に生れるの自由、生活の自由、死の自由、を與へ樣と云ふのであります。

處が因緣果の爲に生れたくないのに生み落されるから、生れざりせば、とか、生れざれば此の惱みなかりき、など云はなければならなくなるのであります。それと同じ樣に生存中の活命も其の計營が斷えて、生活の惱みを生ずるのは、歸する處、因緣の爲の生活であるからである。タデ食ふ虫も好々とやら云ふ詞はすでに眞の自由に非ずして因果の繩れである、一時は良くとも永々に生命の無き者、謂ゆる腐れ緣の如きは生活の自由を得た人のやり方ではない。次に死の自由の云ふのは、心中、自殺、他殺害死、橫死、などは死の自由人でなはい、死の自由人は用事がないから死んで新しい體を持つて次の用事を仕やうと云ふ樣な氣分を持つて、病氣や他の爲に苦るしみながら死ぬでなく、笑ひながら死んで行かれると云ふのが死の自由人である。

以上の三ケ個の人生に自由を與へ樣としたのが、佛の大慈大悲の靈光の響きであります。此の音響こそ佛說であり、佛の魂の現れであり、私達の得んとする靈玉であ

ります、此の靈玉は無上寶球、不求自得、の不朽の寶玉であります、此の寶玉を私達の魂に把持させた時、即ち加持であり、寶玉と私魂とが統一して一個體と成つた時の活動こそ、祈禱でありまして、其の結果が生きた利益と云ふ者でありましやう。

以上三個の自由を得るのはどうしたら可いか、と、云ふ事に成りますと、其れは信仰に依つて得るのであり、ではどんな信仰かと云ひますと、具足の信仰、即ち神佛のみ信じて教法を守らない信仰や、理窟計りこねて神佛の實存を無視したりする信仰や幻しの様な神教佛法などをのみ信じて、生きて眼前に見える三界の本尊を信じない信仰等では倒底三個の自由、即ち生れるの自由、生活の自由、死の自由、を得る事は出來ません。

人としては三個の自由の内の生活の自由にのみ力を入れて、幾萬年間生活の自由を得る爲に爭鬪を連續けて來たか。否、今尙を生活の自由の爲に有ゆる法方を持つて、人生を考へてゐるではありませんか。失業者の多い今日に於ては尙更であります、唯

だの一日の生存さへも不安でならない。何んとかして生活の安定を得たいと云つて徒り廻り、神に祈り、佛に禱り、するのでありますが、結局生活の自由を得る事が出來ず、多くの子供を殘して悲しい死の運命に運ばれて行く者が少くなくないのです。人の一生は、生活の自由を得とする努力であると云へば云へます。

けれども或る物質、即ち生存費の豐富な者は生存の苦しみはないだらうが、活命と云ふ事に成つたら、貧乏人よりより多くの惱みのある事は事實である。彼等には死の惱みが、日常眼前に彷徨してゐるのであります。ですから、人間としては、

一に生活の自由を得る事、
二には、死の自由を得る事
三には、生の自由を得る事

を得なければならない、此の三の自由を得る事に於て人生の幸福は得られるのであります。佛教は

活命の自由

活命のはかり事なからん人の命ちのさゝえんとせん。

と誓はれた、佛の因行果德こそ私達の手に得なければならない。是れが佛敎を信ずる人々の、大誓願であるのです、俗に大願と云ふのは以上の三大自由を得る事であります。

それをなんぞや、生活の自由の内の一小分の病氣とか金儲とかをのみ祈つて神佛に苦勞をさせるなんてあまり禮儀を知らぬも程がある、此麼人々を非禮者と云ひ不孝者と佛敎では呼んでゐます、經文の如く修養修行すれば、必ず大願は成就するのであります。それは神祕的ではない。俗に云ふ好きこそものゝ上手なれと云ふ事は神祕ではない、それは天才と云ふ者の母である、其のゆえは子供が五歳六歳位い迄では、人生の全部に趣味を持つてゐる事は誰れでも知つてゐる處でありましやう。ですから天才兒は育する事が出來るはずです。けれどもそれは子供の要求に應じて、親が保護しながら與へれば、必ず成功はする者であると私は信じてゐます、其の信ずる根據は佛

敎に如來祕密、神通之力と云ふ句がありますから、私は此の句を根底として、天才兒を兒す事が出來る者と信じます。私としても十九ケ年の體驗を持て申上るので有ますとんだ處へ脫線を致しましたが、私達が、神佛を信じ宗敎を奉戴すると云ふのは、死の彼方の安心を得るのみでなく、又は現生實活の安易のみを得るでなく、生死を、離れて生死の自由を得る事にあると云ふ事を、宗敎信仰の根本の目的である事を斷言致します。生死の自由が得られゝばこそ生活の惱みも去る事が出來ます。生死の自由を得ずに、生活の苦を去らうと云ふのは次第を過つてゐる者であります。生死の自由に付いては、拙著

巖頭の叫び、入門の手引、活る日蓮宗又は法華經、日蓮遺文等を御參考下さい

私は今一歩を進めて生活と宗敎の關係を申してみたいと思ひます。けれども今此書では數紙が尠くないのでありますから、直入して申上る事に致します。

第四章

私達は。罪を謝す爲に人間に生れたのではない。
過去に大罪を作つたから此の世界へ生れて來たのもでない。
私達は自分　自から罪人化したくはありません、それよりは善人たらん觀念を構成したいと思ひます。佛敎では小乘を說いた時代には此の世界に。惱んで居る人々の精神に肯定をして、此の世界は苦なり、無常なりと叫びましたが、苦界から一日も早く離れたいと云ふ、信念を養つて後に大乘へ入つて、此の世界は三千大千世界の內の最善なる、常寂光土であると云ふ事を說いて、人間生活に生命と光明を與へたのであります、ですから人間を罪人の犯罪人と呼んだのは一種の方便であつたと云ふ事は法華經で說明してゐます。
無量義經に曰く

往日說たまふ所の、諸法之義と、今說たまふ所與、何等の異ること有れば。而も甚深無上大乘無量義經のみ、菩薩修行せば、必ず疾く無上菩提を成ずることを得んと言ふ。是事如何ん。
唯願くば世尊一切を慈哀して、廣く衆生の爲に、而も之を分別し、普く現在及び未來世に法を聞こと有ん者をして、餘の疑網無から令めたまへ。
於是佛。
大莊嚴菩薩に告たまはく。善哉々々大善男子、能く如來に是の如き甚深無上の大乘微妙之義を問へり、
當に知るべし、汝能く利益する所多く人天を安樂し衆生の苦を拔く眞の大慈悲なり眞實にして虛しからず。是の因緣を以て必ず疾く無上菩提を成ずることを得ん、亦一切の今世、來世の諸有の衆生をして無上菩提を成ずることを得せ令めん。
善男子、我先きに道場菩提樹下にして端坐すること六年にして、阿耨多羅三藐三菩

提を成ずることを得たり。

参考（汝等諦かに聽け、乃至、一切世間の天人及び阿脩羅は、皆今の釋迦牟尼佛、釋代の宮を出でゝ、伽耶城を去ること遠からず、道場於坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂へり。

然るに善男子我れ實に成佛してより已來、無量無邊百千萬億那田陀劫なり）

……　法華經壽量品、

佛眼を以て一切の諸法を觀ずるに宣說す可から不、所以者何ん　諸〳〵の衆生、性欲不同なる事を知れり、性欲不同なれば、種々に法を說き。種々に法を說くこと、方便力を以てす、四十餘年には未だ、眞實を顯さず、是の故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずることを得ず。……

……　無量義經說法品

と說かれてあります。此の經は要するに釋迦の大宗敎を解決する經文であります。此の經の次に、此の經と連絡を以た經文が、釋迦の眞實の經文である事は、誰れも知

る處であります。此の經に來たると人を罪人呼びはしない、と同時に此の地上をエバラだの瓦土だの穢土だのとは云つてゐないのであります。云ば私達はあらゆる萬苦を冒して、一切の罪業を滅して善業功德を積んで、やつとの事で人間に生れて來たのだと云つてゐます。

人身は受け難たし、佛法には遇ひ難し、

とは日蓮上人の金言であります。斯麼意味でありますから、地上の生活を呪ふ爲に宗敎を信ずるのではないのです。けれども多く宗敎信者を訪問しますと、昔し印度の波羅門徒が地上の生活を呪つて、二度此麼地上や世界には生れ度くない、それは、因緣があつて生れるのだから、其の因緣を消滅さしたいと云つて、有ゆる苦惱の大行をして生活し、ついに死人と同じ樣になる。死んで行つた人間は同じ姿では歸つて來ないから、天國なり見えざる國へ往生した者だと信じてゐた、其の思ひ方と同じ樣な考へでゐる信者もあります。又死後は如來樣の兩手におすがりして、赤子が母の膝です

や〳〵と寢る時の樣な、事になると思へてゐる甘いお客さんもあります。

私達は三千年後の今日波羅門生活の樣な事はしてはゐられません。

けれども、此の觀念なり信仰は、神なり、佛なりの實在を判然りと認めない以上はや張り革信する事は出來ません。神の實在を信仰や觀念の內に認識しやうと云ふのが現在の神の實在說であります。佛敎から申しますと衆生心具の佛性と云つて、佛の實在なり、神の實在は歸する處、私達が信ずればこそあり、信じなかつたら、無いも同然である、と認めてゐるのが。普通學者で、宗敎學者になると中華の倫理と同じ樣に我が精神內に佛と同じ樣な性情がある、其の性情を養つて身の上に即ち行爲の上に顯らわさうと云ふのが、宗敎であると云つてゐる學者があります。是れを今申した衆生心具佛性と云ひ九界心具の佛性とも云ひまして。此の佛性なる者を行爲の上に、即ち生活の日常に表顯して行く生活を宗敎生活と云ひ、其の佛性が潛在した場合は凡俗になるから、こそで身上に顯すべく引導をする。其れを間違ひたのが死んだ骸に向つて

引導するの鐘を打つのと、騷いでゐますが、其れが佛法の根本を失しなはれてゐる事なのであります。けれども人の性は善なる哉と云ふ詞に一致するのでありますから、心具佛性は一般には用をなさないのであり。人の性は全なる哉ならそれで可いが唯だ善の善では信じられません。矢張り善心も惡心も平心も等心も矢張り一人の心の內の事でありますから、佛性があると同時に地獄性から餓鬼性畜生性もある、中には人間性と云ふもある。天人性もありましやう。が、其の內の佛の性のみを永久に顯らはしてのみ居る事が出來る者ではありません。だから佛性があるとのみ信じてゐてそれで成佛が出來た、三つの大自由身を得たとは云へません。法華經には、諸佛世尊は衆生をして佛知見を開かしめ、淸淨なることを得せしめんと欲するが故に世に出現したまふ、

衆生に佛知見を示さんと欲するが故に、世に出現したまふ。

衆生をして、佛知見を悟らしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。

衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に、世に出現したまふ。

舍利弗尊者よ、

是れを諸佛は、唯だ一大事の因緣を以つての故に、世に出現したまふとなずく。

と說かれてゐます、此の開示悟入の四字は己人の佛心を敎へて、人間の淸淨なる事を敎へた者であります。けれども是れは未だ釋迦の本說ではなくて、方便から眞實への道すがらの假說であります。ですから、此の信敎から云へば、私達の心內に尊い御佛と同格の心を持つ事の出來る性質があると云ふ事を、自覺し覺信して、其の性質を呼び出す事が必要であると云ふに過ぎないのであります。否、呼びさえすれば必ず出現致します、

佛は戀慕するが故に、出て、爲に法を說く。

と云つて佛性に戀れ慕ふのが信仰であります。では其の佛性と云ふ圍外には佛と云ふ樣な者はないか、（又は現代人の知の神）と云ふに、釋迦は有ると說いてゐる。其

の佛なり神なりは怎な者かと云ふに。來つて釋迦は本因を說れたのであります。其の本門の說に成りますと佛敎心髓が判然りと知れるのでありますが、今私は本門に說かれた釋迦の大理想を說く前に、準備說として迹門を一通りお說をしなければなりません。日蓮宗の人は直きに本門がどうで、迹門がどうで、一致がどうで、劣勝がどうの

と云つて居ますが、結局はカハズの念佛に過ぎない樣に思ひます。

是は法華信者にはお分りですが、未信者の方にはお分りになりますまいが、法華經は一部八卷で品目が二十八あります、二十八品を一から十四迄でも迹門と呼んで、十五品から終り二十八迄でを本門と呼んで居ります。迹ばかりと云ふ意味で今だ本物でないと云ふ事だと思つたら大差はありません。けれども此の迹りの說の中に今述べた開示悟入の說が說かれてゐます。要するに迹門は理論的に佛を說いたのですが、本門は事實の上に佛を見せたのであります、けれども此の見せ方は、觀經の十六觀の觀念內の構成佛とは違つて、誰れの眼にも見える佛を見さして、佛に成るべき法方を說い

たのであります。迹門の時の成佛は三階級の成佛がありますが、本門になりますと有智無智、善惡、の差なく佛に成れたのであります。佛に成ると云ふ事は古い詞ですが前に述べた、生の自由、生活の自由、死の自由を得る事ですから、誰れでも是の詞の元に人生を辿つてゐるのであります。ですから、成佛と云ふ詞は古今を通じて、不滅の詞です。處で私達は罪人である、罪の子であるとしたら、成佛、神化、造化も出來る者ではありません。ですから、宗教を信ずると云ふ起點に於ては、必ず罪の子など云ふ事や此の土は穢土など云ふ觀念を放つて神化、成佛をする事を目的としなければなりません、其れは日常私達は望みつゝある三つの自由を要求をする信念化であります。是れを宗教的信念と呼びます。

他人を愛すの、慈愛を施すのと云ふ事は、宗教ではありますまい、人間同類として否人は萬物の靈長として當然の事であると私は信じて居のである。者を愛すると云ふ事を宗教的信仰を持たなければ出來ないとしたなら、隨分人情の墮落した奴だと思ひ

ます。宗教の信念なり、宗旨の自覺はもつと深い廣い者である事を私は法華經と日蓮上人に依つて與へられたのであります。

では法華經で說く成佛觀はどんな者かと云ふに、それに二つある、即ち本門と迹門とであります。章を換へて迹門の成佛觀を說いてみやうと思ひます。

第五章

善男子、是の如き無上大乘無量義經は極めて大威神之力有ましして尊にして過上無し能く諸々の凡夫をして、皆聖果を成じ永く生死を離れて皆自在なる事を得せ令めたまふ是故に是經を無量義と名也、能一切衆生をして、凡夫地に於て、諸々の菩薩の無量の道牙を生起せ令め、功德の樹をして鬱茂扶疏增長せ令めたまふ。是故に此經を不可思議の功德力と號く。乃至、甚深微妙無上大乘無量義經は文理眞正に、尊にして過上無し三世の諸佛の共に守護したまふ所、衆魔郡道得入すること有ること無く、一切の邪見生死之壞敗せ所爲不。（無量義經十切德品第三）

と說かれてあります、これは法華三部經の前經の第三であります。此の經から見ましても生死に壞敗されずと說いてありますが、是生より死へ、は、即ち生れる事、生活する事、死する事。人間三大事を安穩にしやうと云ふ事は明らかであります。人間

三大事では誤弊があれば。生者三大事でも可いのですが、私の立場から考へますと生れる事、私、其の者にはありませんから第二問題であり、第一問題は生活であつて第二問題と成るのが產兒問題でありまして、第三問題が死の問題と成るのであります。けれども死は無常の者であるから生れて直ぐに死が來る事もあれば、中には死產兒と云つて死んで生れる兒童もありますから、死を先に研究し死後のなんたるを明了にして、次に生活戰場に赴向と云ふのが大丈夫と云ふ勇士の決心であり自覺であります處で生活の中に第二人類を產むのでありますから生れる事は第三問題と成つて來ます何故かと云ふに自分は早や生れて了つたからであります。處が僧に云はせると死んでから自分が生れて往く先の事だと云ふ說もあります。是れは佛敎で云ふ十二因緣觀の第三問題であります、十二因緣は生死の因果を明らかにした者で是れに四通りありまして、四十八因緣を明了に說いてゐますから、おしまがあつたら一讀するも東洋精神を養ふ事と思ひます。

死を先に解決するのは。人生の歸點であるからであります。それが故に佛敎では死の自覺とか死後の生活とか往生論とか云ふ死に直入した事を先に論じるのであります死を解決するには、怎うしても歸因がなければなりませんので、序には佛の御元へ往くとか、神の元に歸するとか、人間は玄より生じて、玄に還へるとか、大自然より生じて大自然に覆へるとか、種々に余論はありますが。信ずればこそ論にもなるのですが、信じないとしたら誰れでも知る事の出來る者ではありませんっですが不可見の神が天地を造り、萬物を創造したと云つてゐるのですが、是れは創造、即ち勞作は人間の最高な善業である事を、暗示する爲に神は天地を創造し給へりと云つたのであつて別に外の意はないのである、若し有つたとしたら、神の地位は墮落なのでありますよく人は云ふ、神は完全者であり全智全能である以上は、此麽不徹底な世界を何故に創造したかと云ふのです。是れはあまり極單な云ひ方ですがまあ是れに近い疑念を神に對して持てゐる者が少くなくないのです、人の心に一分間なりとも疑念心を抱かせる

と云ふ事は不良ない事ではありませんか。人情から考へても憂しい人の魂を黑く赤く青く惱ましたくはありません。神は明神であるはずです。其れが創造された者に疑はれると云ふのは、要するに人の產んだ子供を我子としてゐるから、子供の方に冷やかな觀念が自然に增殖されて來る樣な者ではありますまいか。私はいはゆる神に依つて創造されたとは思ひません、矢張り父と母とから創造された者だと信じてゐますそれは淺薄だ其の親の親の又親の親はと幾百千萬劫を問詰て見ろ、必ず神と云ふ詞が出ると云ひますが。借問して、神は誰れが創造したかと問へば、神は神なるが故に自ら然ませると、マホメットの樣な事を云ふ者もあります。が、少くなくとも地上の全人類を支配して人生の幸福を與へんとする宗敎は、そんな輕薄な考へから成立する者ではありません。最うと甚深なる思考が含まれてゐなければ成らないのであります。神なり佛なりは人生の歸局に存在する者でありますから、誰にも一毛の疑念をも入れない處に實在をしなければなりません。そこで此の參考として法華經の迹說の神佛の

存在は何處にあるかを述べてみましやう。

神佛の實在を明了にするのは即ち人生の歸赴を明了にする事であり、生活の安易を得る事であります。ですから宗敎には信仰の對像として神なり佛なりを向うに置いて禮拜供養するのであります。佛敎から云ひますと、

一に本尊、神佛のなんたるを明了にする事

二に信敎、修養として又は神佛迄で赴向く處の軌敎であります。

三に信行、前の敎行じて信ずべき本尊への努力の場即ち戒壇でありまして此の三つを具備しない宗敎は即ち宗敎に非ず、宗旨にあらずで、唯だ名のみあつて其の實なしと云ふのであります。然し此の三つの問題に成りますと、宗敎の問題でなく宗旨の問題に成るのであります、けれど口なり筆なりに表れる以上は敎へであるから宗敎と云つても支差はありませんが、眞實は宗旨の問題であります。宗旨と云ふ事は宗る事の旨とも宗旨（主旨）（主義）と譯しても可いのであります。何々主義と云つたら其

人の其れが宗旨でなければなりません。處で此の主義、即ち宗旨問題に入りまして、家の佛壇の中の本尊は阿彌陀如來だとしたら、前には阿彌陀經の三部經が置いてなければ、奥の本尊は木像であつて信ずるに不足ないのであります、なぜかと云に前に置いてある經文は阿彌陀如來の靈魂、即ち心表であるからです。處が阿彌陀如來が其の家の本尊と致ますか、して隣りの家はと問へば大日如來樣、次の隣りは十柱の神其の又隣りは釋迦如來、其の又隣りはと聞いて歩む樣な馬鹿者はないだらうが、ほゞ社會はそうなつてゐます。處で阿彌陀如來の安在所即ち佛壇の置いてある處が阿彌陀如來への御修行所であるから、隣りは大日如來への修行所と成りますが。それは本當の修行場ではありますまい、眞の修行場は阿彌陀如來へのは西方へ十萬億の土を過ぎてどつかにあるさうです。大日如來のは南方とは云つてゐますが理數わ分りません十柱の神、キリストの神は天であるとは云つてゐますが理數が分りません。何れも其の處が本座本當であつて此の娑婆世界は皆な出店に過ぎないのです、現代の樣に人間が

どし〳〵増加されて來るのは、不信者が多いとみえて十方の神の世界佛の世界から、信仰が粗製亂造なので送り返されるに違ひない。日本などは殊に人數が多いから、海外へ送つた處でたかのしれた此の地上だから百年後には又滿員になる、用でもないのに戰爭をして人を殺さなければなりませんから、外方崇拜、此土厭呪の大信仰者を造つて十方世界へ送つて了ふと云ふのも、妙考かも知れませんね。

けれども其れは駄目、佛敎には、

此土有緣の生者（衆生）は此の土に於て菩提を成ず。

と說いてゐるのですから、他方へ往つても送り返へされるのは當然であります。娑婆有緣の者は矢張り娑婆を離れて生活の安定は得られないのであります。生活の安定を先ず明らかにするのには人として根本の目的を明了にする事にある。其目的を明了にすれば、必ず生きなければならないと云ふのが最高の目的でありましやう、けれど唯だ生を保つと云ふのではない、其の處には生樂と云ふ者がなければなりません。

此の生樂と云ふのが、勞働の原因であり爭鬪の元因であり、人としての氣分の玄因であります。共生自受樂、若くば遊樂が人としての生命であると思ひます法華經には衆生の遊樂する所、としてあります、凡俗的遊樂は苦惱が後からついて來ますが聖賢の遊樂には苦惱は尾行しては來ません、其の遊樂の園を佛敎では道場とも云へば戒壇とも云ひます。其の場所の中心に正立する者が本尊であります。處が此の本尊に依つて場所が異なります。爭鬪する人の住所を修羅の巷と云ひ、罪人及聽人の住所を地獄と云ひ學術研究者の集合する所なら學堂と云ひ、佛の住所を極く樂しい所とひ、返對の苦るしい所を地の獄くと云ふのであります。住む人に依つて土地の變化があるのです。ですから其の地上を極樂に化さうとするには全人類を佛化しなければなりません。が、唯だ佛化しなければならないと云ふ迄で中心的標準がなければ駄目ですから全人類の共通なる目的即ち本尊と云ふ物を定めなければなりません。處が本尊と云ふと、なにか金ぴかに煌いで私達の生活を思ふが儘にして下さる樣に考へてゐる人が多

いのでありますが。それがとんだ間違であります、それですから神なり佛なりが天地を作り、天地を滅す者であると考へてゐるのです、其の考への中には努力も向上も滅して了ふ樣な恐ろしい宿命論が潜伏してゐるのであります。ですから神佛は天地萬物の職工と考へてゐる宗旨や宗教を信じてゐる人、それから中華の天命論の信者、次に自命哲學者などは、何かと云へば運命とか、宿命とか天命とか云ひ、古い人は是れも因緣だと云つて努力の信念を失つて了ふ人が多いのであります。一應是の問題は

『そうなつたのが運命だ、天命だ、因緣だ、宿命だ。』

と云ひつめれば詰められない事はないが、此の問題は容易に利用する問題ではなくつて、其の運命なり宿命を政伏して、自己の滿足、他人への幸福との二つの新しい果命を得樣とする努力がなければなりません。即ち、

こゝまでおゐで。

と行詰つた時、呼れゝば全力を持つて行詰つてゐても、此の一言を加味して最う一

歩を乘り出す事が出來る、是れは子供時代によくある事で誰れでも體驗のある事と思ひます、此處迄おゐでの叫びは強い人中の力を呼び起す宗教であると私は信じてゐます。

運動會なり競爭の時、應援團の叫びは確かに宗教的の叫びであります、

それもう一と氣、

と呼ばれるとぐいと乘り出す、其の力、は新しい生命の活躍であります。合して云へば人間の生活戰なり生存競爭の應援團長は釋迦牟陀佛であり、應援歌は宗教であります、處が三廻競爭があるとすれば始めと中程と最後との內に於ては疲れた時は最後でありますから、生まぬるい應援では倒底勝利を與へる事は出來ませんから、應援者の全生命は選手に與へる信念で自分を忘れて應援しなければならない、其の應援力を大慈大悲と云ふ。其の叫びを妙法連華經と云つても差支はないと信じます。

此の譬へは不徹底ではあるが、運動家は確かに此の信念を理解する事が出來ると思

ひます。現代の様な行詰つた生存爭競の時代には、是非とも大應援者がなければ、生活戰に敗けて了はなければならない。生きんとする私達は良き應援者を得る事は、生者としての力を得る事であります。其の應援者を名付て本尊と申して置くも可いと思ひます。

そうして其の本尊のなんたるを明了にして自分と本尊とがあまりに反對な思想であつたら互に理解が出來ませんから、應援の目的を失ひます、私は、私達の生活の應援者として頼むには佛圍外にはないと信じます、けれども其の佛は文字や過去の佛や幽靈の様な佛では駄目だと思つてゐます。是の處迄で來ますと、佛敎の本佛論のお話をしなければなりません。此の娑婆世界を中心に三千大千世界の守護、救濟、の佛は誰れ。此の問題を明了にしたいと思ひます、私達の住所の外の世界の佛は矢張り其の世界の人間を守護し救濟してゐるのですから、其の佛を信頼した處で仕方のない話しですから此の世界の守護の佛を明了にして、守護や救濟を信頼しなければならない。

そうして生死、生活の惱みを脱して清い人生を辿つてこそ、人華の花辨は悠然として開かれる事と信じます。

是れを一と口に呼んで。法りの華の宗とも華咲く法の宗とも云ひ、法華宗、（眞理化の主義）と云つてゐます。此れが地上の宗敎であり、宗旨であると思ひます。他は十萬億土の宗敎であり、天國の宗敎であり、南方世界の大日如來の宗敎であり。地上の宗敎と云つたら、法華宗圍外にない事は、他の宗敎の經文に說いてある事でありますから、法華宗圍外の經文を見たら、彼等が世界の宗敎でない事は困る程明了であります、私達は世界の人間だから、此の世界の宗敎を信ずるのが當然だと思つてゐます宗敎やの様に、何んだから何んの宗敎は厭けない、此の宗敎でなければ救はれないのと云ふ様な、お正月氣分にはなつてゐられない。現代は十二月三十日、明日一日が人生の滅不滅の境界である。だからお正月氣分は先づ去つて。人生の幸福の鍵を得様。

第六章

では斯界の宗教とは何にか。私は妙法蓮華經也と躊躇せず即答をするのです。して何故にと云ふでしやう。私は二答するのを喜んで法華經全部は斯界の衆生の目的を明了として、人間の歸點を親切に說明された書であるからと答へて話を進めます。

世界の人間は斯界の宗教を信じなければ人間苦を脫する事も出來なければ、成佛もする事は出來ないのは當然の事である。

して其の法華經を持つて宗旨と定めて布教をしてゐる宗旨が幾つあるかと云ふに、大別して、

一に天台法華宗

二に日蓮法華宗

であるが天台は元より個人主義的であつて現代人としては信ずるには不足ない、眞

言宗と同じ樣に理窟が多くつて哲學的宗教であつて、人間的な宗教ではない。日蓮の法華觀に成ると現代人としての要求の宗教其の儘であるが、困つた事には日蓮法華宗が鎌倉時代より今日迄で流れ流れて、壓迫と爭鬪の仲に呼吸して來たので、それが爲に宗門內の爭ひは絕ず、ついには派に分れて、今尙九派がより分離して、九派百亂の有り樣でありますは實に殘念であります。其の脈亂を見るに、一は信仰より生ずる自高我慢の煩惱の炎の强き故、二には既成宗教の形式に愛著が强き故に、三には法教を信じて人體を輕視する故、四には佛教の因緣、次第、意義、を明了に知らざるが爲五には宗教を持て自己生活の安易を得んとするが爲に。六には佛教は難解點が多き爲に、七には日本宗教及信教があまりに兒童的開放なるが爲、八にはあまり神秘的說の多き爲、九には僧侶があまり無自覺なるが爲、十には信徒の信仰心があまりに姑息的なるが爲に。である、以上の十條の條件が現代の樣な妙な宗教を創造して了つたのであります。誓へば日蓮法華宗の中に本門でなければ可けないの迹門ではなければ、

利益がないのと云つてゐます。けれども本門は本物だから可いのは分つてゐるが、其の本門（本物）が間違ひだらけである。一の本尊論から云つても、

法本尊、即ち妙法蓮華經、中心本尊、
人本尊、即ち久遠實成の釋迦牟尼佛、
人法一致、木像等に向つて法華を唱へる事即ち十界の形と法華經の題目と平等視する事。

又は妙法蓮華經の七字の光明點の題目を中心に其の四方に十方の諸佛世尊、十界有情一ももらさず列座する十界の曼荼羅を人法本尊とも云つてゐるが、其れが未だ定つてゐない、宗門の專門家達自からが迷つてゐる有り様である。處が法本尊、即ち眞理が私達の歸依の中心者であると云ふ事は、法華經の法師品第十に若は經卷所住之處には、皆七寶の塔を起て、極めて高廣嚴飾なら令む應し、復舍利を安ずることを須ゐ不、所以者何ん、此中には已に如來の全身有ます、此塔をば一切の華香、瓔珞、繒蓋

幢旛、伎樂、歌頌を以て、供養恭敬、尊重讃歎す應し、若し人有て此塔を見ることを得て、禮拜し供養せん、當知べし、是等は皆無上正遍知に近づきぬ。と說いてあります、此れは法師品即ち迹門第十の本尊論であります。妙法蓮華經の外に本尊はない外の者をごてゞと列べては可けないと云ふ事であります。唯だ妙法蓮華經の要法が本尊であると云ふ法本尊論をかつぎまはしてゐる人の說と同じであります。同じ法師品に法華經を信仰する人の價値が揚げてありますが、是れは信者本尊論と云ふの說で次に說いてあるのが、同品に法華經の一句を說く者を禮拜、供養すべしと云つてあります、法師本尊論であります、此の三つ何れも迹門起立の法本尊論でありましやう。

それから迹門の人法本尊論になりますと、見寶塔品に爾時に多寶佛、寶塔の中に於て、半座を分ち、釋迦牟尼佛に與へて、是の言を作し給ふ。釋迦牟尼佛、此座に就き給ふべし、即時に釋迦牟尼佛、其の塔中に入り其半座に座して、結跏趺座したまふ、爾時に大衆二如來の七寶塔中の師子座上に在まして、結跏趺座したまふを見たてまつ

り、各〻是念を作さく、佛高遠に坐したまふ、唯だ願はくば如來神通力を以て、我が等輩をして、俱に虛空に處せ令めたまへ。即時に釋迦牟尼佛神通力を以て諸〻の大衆を接して、皆虛空に在きたまふ。大音聲を以て普く四衆に告たまはく、誰れか能く、此の娑婆世界國土に於て廣く妙法蓮華經を說かん今正しく是時なり如來久しからずして當に涅槃に入るべし、佛、此の妙法華經を以て、付屬して在ること有らしめんと欲す。と說いてありますが、是れは俗に日蓮宗では三寶樣と云つてゐる樣であります。

法華經の題目を中心に向つて右に多寶如來、左が釋迦牟尼佛が座してゐる處です。

それから本門の從地涌出品第十五になりますと、此の三寶の前に十方世界、即ち三千大千世界のあらゆる諸佛世尊が列座してゐる處へ、娑婆世界の下の、虛空より、身より金色の光明を放ちて、三十二相具足された、見るも尊き菩薩が六萬恒河沙と云ふ程多く大地を破つて現れて來た、其の中の四人が上首として先に。

七寶妙塔の多寶如來、釋迦牟尼佛の所に詣づ、到り已て、二世尊に向ひ頭面に足を

禮し、乃至諸〻の寶樹下の師子座上の佛の所にても、亦皆禮を作して、右繞三帀して合掌恭敬し、諸〻の菩薩の種々の讃法を以而、以て讃歎してまつり、一面に住在の欣業して二世尊於膽仰す。

とありました、俗に此の菩薩を日蓮宗では上行等の四菩薩と申して、此の菩薩が現れたので釋迦が三千年昔し、即ち伽耶城を去つてから成佛したのではない、實は無量無邊百千萬億那由陀劫の昔から佛に成つてゐるのだ、と云ふ事が其の座にゐた人達に分つたのであると云ふ事を說いたのが、法華經の壽量品であります。釋迦は此の經品に依つて三千大千世界の最高の古佛であると云ふ事が明了に成つた、其れ故に此の佛を久遠實成の御佛と云ふのであります。此の事を顯本遠壽、久成如來とも呼んで此の佛を尊として宗式を經てゐる團體を人本尊宗と云ふのであります。此の久遠如來の四方に供として上行等の四菩薩が座ず、是れを一佛四尊の本尊と云ひます。此の如來は本住を此の娑婆世界に宿存してゐると云ふのが法華經の說であります、して是の

如來は常に法華經を說かれてゐるのです。前に述べた通り彌陀如來は西方淨土で彌陀經を說き、大日如來は南方で大日經等の經 敎 を說いて、其の國土世間の衆を敎化してゐますが釋迦は此の娑婆世界で法華經を說いてゐるのであります、けれども倒顚の衆には近しと云へども見ざらしむ。で倒顚をしてゐては見る事は出來ないのです。此の話は後として、斯界の宗敎としては法華經の外にないのであると云ふ事は、私が云はなくとも誰れも知つてゐる事と思ひます。

けれども是れで私が云はんとする斯界の宗敎の話が了るかと云ふに是れ迄では序論に過ぎないのです、凡てを無視して自分の意見を述べたくない、凡てを抱擁してそれに生命を與へてそして、私達の生活の資價と成るべき寶法を法華經の法田から得たいと存じます。が、此れ迄で申し上たのは、信仰の對像であつて生活の上の信仰の對像即ち本尊ではありません。生活の上の信仰の本尊と成りますと法華經第二十の不輕品と云ふのがあります、是の中の一部を說いてゐます、日蓮上人も法華經の修行は不輕

菩薩の如くせよ。と云つております。其の不輕菩薩と云ふのは一切の衆に向つて禮拜供養のみして讀經はしなかつたと云ふ。彼の菩薩の行觀は心佛衆生は一であると云ふ見解から衆を禮し供養したのであるが、法華經を修行するには斯うしなければならない、けれども誰に頭を下げて禮拜したのではない。衆の心中に潛在する佛性を呼び起したのでありましやう。處が釋迦なり不輕菩薩は何故に衆を拜したかゞ、疑問の中心であります。云ば私達は釋迦なり敎法なりを中心にして本尊として今日迄で信じて來ましたが、其の釋迦牟尼佛は成佛する前に何を本尊とし、何にを本尊への軌道として辿られたのであらうか。そうして何に故に本尊とした處なり戒壇なり道場なりへ釋迦わ行かなければならなかつたか。の以上の三問題を先づ明了にしなければなりません。是れは釋迦に對する佛敎計りではありません、キリストに於ても日本神道に於てもそうであります、此の三つの疑念を根本から明了にしやうとする者です。眞實の大信仰者と成るべき者であると私は信じます、そんな事は怎うでも可い自分さえ幸福

になればそれで可いのだから、金儲の利益を下さる神佛にさえ禮拜、供養したら可いと思つてゐる人非人は別ですが。信仰は人生を形付ける者であるから根本から眞面目になつて研究しなければならないと思ひます、私達は是の意味に於て根本者、即ち釋迦牟尼佛を研究しなければなりません。けれども是れを研究するには、二た道あります、一は釋迦牟尼佛と云ふ者が實在をしてゐたや否や、並びに人間として實在してゐたとしたら、其の時代の印度の國勢及國情から研究して行かなければなりません。二には人體として存在不存在は問はずに、經文を中心に研究する事であります。そうして現代人に合するや否やを研究し明了にする事であります。私は今第二研究法に依る方が實踐的はないかと思ひます、第一の研究法ではなんと云つても三千年の昔の話であるから、研究が出來たにしても想像が多いのと、直接人間生活に用をなさないで理論に流れ易い弊がありはせぬかと思ひます。ですから私達の人生は短いのでありますから、それよりも經文を中心に研究した方が完成の日も早く、印度迄で出

張しなくとも可いかと思ひます。此の意味から法華經を中心の礎として人生を觀ると怎うしても現代より將來になればなる程、法華經の人生觀が私達の總の書であり、靈の叫びだと思ひます。今は時代も人間も凡てが行詰つて、老體か死人と云つても可い樣な時代である。人は生活に苦しみ、活命の計り事は失なはれんとしてゐる時代失業者の群れが騒ぐ頃、貧乏人は自由の死を與へられる頃、生んとする爲に肉を金に替へ汗を酒に替へ、妻を米に替へ、娘を家に替へる頃、五濁の惡水は大都市をして浪高く荒れてゐる。路行く人の眼付は猛獸が血潮の滴れる肉を求めんとする樣な鋭どい瞳を見開いて彷徨してゐる、平和は誰れの顏にも見る事が出來ない、子供は笑ふ勇氣を失ふて了はんとしてゐる。凡てが死の面影を見せてゐる、世紀の秋は來た、然れど木果は結ばうとはしない、それは秋に非ずして死の影である。生者にして活命を失ひたる者の惱みは其の人でなければ、他の人の知る事は出來ない惱みである、若し彼に永久の食を與へる事が出來ないとしたら、なまじ一食や二食の飯を盛つて姑息的な救濟を

する勿れである、二度彼が活命を失ひたる時は死の惱みを二度繰返させるのと同じ事である。血あり涙だあつて彼等を救はんとするならば、同に血と涙の無くなる迄で供に養はんと云ふ大信仰を起さなければならない。此の信仰に生きた釋迦は大地獄に自から飛び入つて妙法華經を彼等に與へたのであつた、釋迦は自から久遠の昔し此の娑婆世界に在つて、衆の諸苦を同にして自から先きに醒めて、後、其の幸福を衆に與へて共に生の安を辿らんとした者である、けれど其の生活方は他人の財産をあてに出家をする法方ではない。現代の僧侶は多くそれであらうが、釋迦はそんな奴乞食的な事もしたのではない、四十餘年乞食をしたのは、方便である事は無量義經に於て明了な者であります。法華經を說かない時代の釋迦は此の世界圍外の世界の生活法なり信仰方法を、地上の人類に研究の資料として提供したに過ぎない、だから眞實釋迦の說が尠なくつて、他世界の佛、如來の說相が多いのである。法華經の他に釋迦の宗敎はないと云ふ事は專門家でない私にだつて明了に答へる事が出來るのであります。そし

て宗敎は既成宗敎の形式の愛著を持つて現人をして迷はしてゐる樣な淺薄な者でないと云ふ事も證明する事が出來ます。それに大事な事は釋迦が怎な方法を持つて成佛する事が出來たか、と、云ふ問題を苦もなく答へる事が出來ます。けれども此の問題は前の三つの疑問を說いたら分る事でありますから、それから申上ます。が、私達は斯界の宗敎として久遠實成の古佛即ち久成の釋迦牟尼如來と妙法蓮華經と日蓮大聖人とを三寶とは信じますが、是れで斯界の宗敎が完成したとは思はれません。より一歩時代に的合された、そして私達に活命を與へる者でなければ信じて生命とするには不足いと斷定するのであります。

第七章

私は斯界の人間である以上は法華經を信じます、けれども文字の本尊や夢の本尊、無常の本尊を以つて、自分の生命迄でも歸依い仕様とは思はない、と、同時に私は妙法蓮華經の五字に對しては金色の如來であると云ふ信仰は堅く持つてゐます、けれども其の金色の如來は見えざる者としてでなく、日常生活を供にして、泣く時は共になき活動する時は共に活動をする、妻よりも親しき、親よりも親しい、不滅の御佛であります、けれども其の御佛は一神教的とか凡神的とか多神とか云ふ樣な者ではなく、云ば私を守つて下さる神佛は一人しかない、その替り私を守る神樣を直接には他人を救ふ樣な事はしない、若し救ふ樣な事があれば私を通じてでなければ救はない、處が他人にも一人を守る神はある、だから其の守る神を認めない人々に、認めさせると云ふのが私を通じての救濟である、けれども私は救濟者でもなければ、法師でもない、

自から法を受けて遊樂する者であります。遊樂と云つても、金の爲に遊ばして貰つたり、女の爲に遊して貰つたり、花や紅葉に樂しまさして貰ふのではない、即ち眞理を人に出來るだけ聞ひて貰らうんである、けれども天理教の布教法とは違ふ事を斷つて置く。神なり佛なりの救濟と云ふ事は必ずや、苦るしがつて宣傳はしてゐない、經文にも衆は法を求める事一心なりとあり、衆生は教化する事もつとも易しと云つてゐます。時機想應すれば教化も感化も樂くな者であります。時機不想應であればいくら汗を流して教化し感化してもそれは駄目であります。現代の人に向つて神佛は汝の前に寶を運べり、と云つてもそれは有難いと云つて信ずる奴はあるまい、あつたとしてもそれは幼稚な人間だけにしか通じないのであります、其の幼稚な人間のみが宗教を信じ、諸佛を信じた處で具足的な信仰は出來る者ではありません。法を信じて諸佛に化さうとは信じないで、法なり諸佛なりを信じて唯だ眼前の利益を得樣とのみするのであります。處が諸佛世尊の利益と云ふのは、即ち一に吾人の體内には如來祕密、神通

之力、が潜在をしてゐる事を示し、二には他人及萬物を尊敬慈愛する事を説いたのである、此の二つが生活戰の武器であります、此の二ケ條の他に佛の利益と云ふ者はないのである。一の如來祕密と云ふ事は、如來には種々あるが、法華では三身如來と云つて吾人の體相性なる者には

一に法身如來と云つて、法は眼には見えないが因果の緣起、は皆是れ法性のなす事四季は目には見えないが、春が來れば花が咲き、夏が來れば暑い、秋が來れば木葉は紅葉に化して木果を結ぶなどは、天地の法性のなす事であります。是の法性が人體の一部をなして神を司ると思つたら可い。中には地水火風の五大六大を法界として說く人もある、それは理窟の方で實踐の方の說明ではない、又法身二十五法身と云ふが現代はそんな者を考える必要はない、けれども神として、是れを法性とも魂魄とも神とも心とも通用する事を忘れてはなりませんが、今は實踐の上に神の一字を借りて法身とは神なりとして、

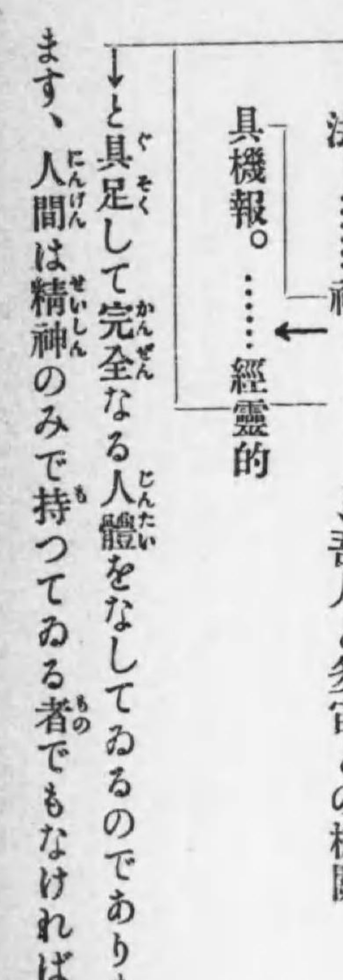
第二に報身如來と云ふのがあります、是れは智報身如來とも云ふから、今は此の如來を經と呼んでおきます。なぜかと云ふに過去から現在へ、現在から未來へと經過して行くのが凡ての因果の緣しであるからです、是れを私達の體に求める時はやはり經の名字でそれで可いのです、第一の神と此の經とが具し合してゐる時は神經として私達の全體にめぐつて六官器の活躍をしてゐるのであります、若し五官機の活躍なしとするなら、死人も同然であり、馬鹿の上の馬鹿と云ふ者になつて了ふ、又經の字を經と讀む事は他人の智識を聲、文、形、を借りて自分等の智識となるからであります。經とは敎へと讀み替へる事も出來るのであります。神經が私達の一部の魂の樣に經敎は世界の一部の魂であるとも云へます、是れを哲學的にこねて行くと面白い趣味ある問題と成りますが、今はそんな事を云つてゐる時ではないから次の

第三の如來に移ります。第三に應身如來と云つてゐますが、應は應現、現象界の全部であります。眼に見える者、耳にきこえる者、手に觸れる物、等が皆是れ應現物で

あります、私達の是の體も應現の者であります。處がこゝに考へなければならないのは應現されたから、それで、滅しないかと云ふとそうではなく無常な者で明日にも自滅するか他愛的に滅するか、それは分らない。病氣にもなれば年もとる、應現したまゝではゐない、應現した體が今日から明日へと又應現されて行く、其應期への永い者と短い者とある、弱い者と强康な者とある。何に故かと云ふに應は精であるからです精は生れるの力と云ふ文字である、精は靈であり力でありますから、精力は人の生命であると云つても可いのであります。其の精力は萬物萬素の集合力と云つても可いと思ひます、此の集合の力の減じた時調和を害します、此の不調和が、病氣であり、極度は散滅に至るのであります。……

以上の三つが具足されるのを三身即一と云て是れを密と云てゐます、私達の一身の内に此の三身があるのを祕と云ひます、祕密と云ふ詞は一身即ち三身であり、三身即ち一に具すと云ふのであります經文から云へば佛として釋迦が四十二年の間此の事を云

はず、如來を遠土の者と云つてゐたのが祕であり、私達が如來であると云ふ事を密して說かなかつたのを今法華經に來つて、釋迦自から、久遠の如來であると云ふと同時に一切衆生も異ならず、唯だ妙法蓮華經なる眞理を受持、するか否かに於て佛と凡夫の差あるみのと說いたのを祕密を明したとも云ひます。が、今實踐的方面から云へば前に述べた樣に、信ずる方が生活の力と成るのであります。此れを總括して云へば



と具足して完全なる人體をなしてゐるのであります、此れが三身如來の樣であります、人間は精神のみで持つてゐる者でもなければ、神經のみで維持してゐる者でも

ありません、中には精神も神經も一つ者だと云ふ人もありますが、是れは西洋式の醫學か、性理學か解剖學から考へて云ふのであらうが、それは大變な間違であつて、精神、經、の三つは神を中心に二者として活動してゐる者であります。祕密と云ふ者は是れで話せたが是れは祕密の體であつて祕密の性は話してない、祕密の性は、此の三身が何つ滅するやら分らない事と、此の三身が如何なる力作の能力があるかと云ふ事が分らない。言ば私が、何年迄で丈夫でゐるか分らない、生命は祕であり、そうして私としても、私のなすべき事がどんな風に運ばれて行くかは、思ふ樣には行かない、人間としての智識以内の事が、經驗のある事なら思ふ樣になつて來るだらうが、無經驗の事や前例のない事は明了に豫知する事は困難であります、是れは私達互に密として知る事が出來ない。即ち運命は密であります。生命と運命、是れ祕密の性であります、次に祕密の相であります。萬物萬象一つ者のない姿は是れ祕密の相である、一つ形の人間の顏は一尺四方はない其の小さい中に、ごて〳〵と目が二つ鼻が一つ口が

一つ眉二つとがある、それが謂く横眼直鼻で、鼻が横に付いてゐる奴はない、皆な同じ樣に付いてゐて、それで日本計りでも現在七千萬、印度が三億全世界の人類の數は無量と云ふ程であるが、一人でも同じ者はない、類似してゐてもならべてみると違ふ即ち一つ物が二つとない有樣は是れ祕密の相であります。此の祕密に相、性、體があればそれに隨つて、吾人々々や物々に活力は違ふ、其の力の差に於て、作す事が違ふ從つて因緣、果報も違ふ、だから、誰れの本末も（生死）も皆な異つてゐますのが、佛敎で云ふ十如是と云ふのであります。是れ祕密の十如是を一寸申上たのであるが如來と云ふ事を述べなければなりませんが、如は眞如でありまして、眞如より來生するから如來と云ふ。即ち絕體如實の眞理よりまどかに現れたる覺者と云ふ事でありますが、眞理と云ふ者はどれ是れと云ふ事が出來ません。即ち眞理は如くであつて、是れと云ふ斷定は出來ません、ですから絕對の眞理と云へば全部であつて一も漏らさないのが絕對の眞理でありましやうが、二以上は相對でありますから全部を絕對と呼ぶ

事は苦るしい云ひ方であるから佛敎では眞如とか如是とか云ふ、眞の如く、是の如くとか云ひます。處で如來と云ふと眞如實相の理が吾人の智識内に加入されて、靈力を增して靈光を放す事を來と呼んで、合して如來と呼びます。云ひかへますと、宇宙の實相と吾人の精神とが合した樣を如來と云ふのであります。宇宙と云へば、靈的方面は十界を出ない、物的方面は五大の變化を一歩も出ないのでありますから悟り易い事であります。云ば三歲を合すと云ふ中華の說と同じ道理であります、天の理、地の理人の理に通じて實行する人は三歲の眞理に化したと云ふ事である。此の三理法を具して一も漏らさないのを法と云ひまして、如來と云つて前の三身を具してゐるが故に、妙と云ふ。即ち妙法とは如來祕密と云ふ事であります。けれどもそれだけ明了になつたつて何んの用もなさない。即ち活動しなければ駄目です、其の活動を神通之力と云つてゐます。如來祕密が私達の體として。神通之力は働きであります。處が働くと云ふ事は其の處に心の力で肉體を通じて之のを變化させる力でありますから、神通之力

と云ひますが、之と云ふ文字は萬物萬衆を形容した詞であります。其の心の力は即ち信念である、信念なくして働きがある者ではありません。爲さんとする働きの前には一心念の中に構成組織がされて、それが、一信念に依つて他物に其の思想が移されて行くのであります、是れを華嚴經と云ふお經には畫家に譬へて說かれてゐます、是の狀態を一念三千理と云つてゐます。法華經には今述べた十如是として說かれてゐますが、其の大極は信の一字の作用に外ならないのであります神通、即ち神ろから神(過)(未)に通ずる心の作用であります。之の一字を物に譬へて萬物萬人、萬神に通じなければならない、

目に見へぬ　神のこゝろにかよふこそ　人のこゝろの　まことなりけれ、

とは明治天皇の御聖歌であります、是れ信心を歌はれたのでありましやう、信仰は尊嚴なる、より高き靈と交るのが信仰であります、より高きは神でなくしてなんであらう、其の神に交る事が信仰の第一條件であります、第二の條件は信仰は、眞交であ

つて眞心を持て互が交際する事である、それは夫婦を始、親子主從より他人に至る迄で、眞心を持て交際する事である、現代は國際を眞心を持てせよ處ではない、夫婦の仲でさえ、芒然してはゐられないと云ふ有り樣であります、從つて親子の仲でも左樣である、況て他人をやであります、此の芒然すると、と云ふ詞の反對即ち鋭い注意をしなければならないと云ふ、其の中には人を見たら惡人と思へ、盗人と思えと、お前百歳迄で私九十歳迄で、共に白髮のはえる迄でと美しく云つた詞を裏切て百年の間も連添ふ者を盗人視さなければならないと云ふ、物騒な世である。自から產んだ子供に精神的に綱を打つてゐるとわ、冷やかな人生である、けれどもさうしなければ生きて行かれないとしたら仕方わないが、それは互に信仰即ち眞心を持つて交際する事を忘れて疑念や僞りを持つて交際てゐるからであります、然し其れも生るが爲に僞らなければならなくなつたのであるだらうが、生ると云ふ事に對して、即ち生るの苦惱に對して餘りに弱かつたからである、同時に眞に生る法、即ち活命の計り事を知らない

からであります。斯の時代に必要なのが第二條件の含まれた信仰でなければなりません。

第三條件は以上の二條件を把持して吾人としての目的へ進行（信仰）する事を止めない事であります、七度倒れて八度目に起る事が出來ないにしても、九度目に起き樣としなければならない。それ又倒れたとしたら十度目と努力を、生命の有らん限り爭を連續て行くの信念を、佛敎では勇猛精進と云つてゐます、此の勇猛精進の信仰心念を具備して前の二つを放さぬ樣に進んでこそ、信仰者であり神通力者であります。佛敎から云へば、

一神交は　諸佛自在、神通之力、であり
二眞交は　諸佛師子、奮迅之力、であり
三進行は　諸佛威猛、大勢之力、であります
信仰　如來祕密　神通之力

と成りますが理窟は怎うにでもなりますから可い加減にして置きますが、單に信仰として神様とか佛様とか云ふ者にのみ、向つて合掌して心の統一をした處で、活力を失つてゐたらなんにもならない、と同じ様に理窟計りこねて神佛の様に眞理化さうとしないのも、何んにもならない。是處に於て私達は、如來祕密神通之力が、私達の此の肉中に存在してゐると云ふ事を、釋迦牟尼佛が敎へて呉れたから、釋迦を、大恩敎主と呼びます。此の力は信念の以何に依つて現れて來るのですから其の信念を持て、此の力を呼び出さなければならない。それに皆さんの體の中にも是の如き力が伏在してゐるのですから、限りない大き聲で、皆さんの胸戸を開きたいと思ひます。開いておゐでのお方は隣りの胸戸を開けて下さい。

其の中には皆さんをして皆さんを一人一人に守る如來が祕くされてゐるのですから必ず胸戸を打てば開きます、

無作三身の覺體顯れ、我等行者一切衆生と同く法性の土に居して自受法樂せん、

と日輝上人が云つた樣に必ず現れます、此の如來を體現させるのが引導です、死んでからの引導では成佛は出來ない。釋迦は死人に向つて引導を與へた事はありませんそれを何故に現代の僧侶は死人に引導を渡すのでしやう、死人に口なしだから可い樣な者の若しあつたとしたら、寢言の樣な引導では成佛が出來ないと云ふだらうと思ふとんだ處へ脫線をした。神通の一言こそ神佛に通ずる即ち引導であります、之力こそ成佛である、神通を蓮と呼び、之力を華と呼びます。天上から燃え儘さん計りの暑光をあび、地上からは濁水煮えて泡をふく其の二の中に立て水火を物ともせずに咲き慢る花を譬へて蓮花と云ふ、其の蓮花と同じ樣な力と作用とを得て、人生を自受法樂と遊び樂しむ眞理化の人に異ならない、故に蓮華佛とも云ひます。以上を具して妙法蓮華佛。と呼ぶ、此の佛こそ私達の生杖である、此の佛の敎へを名けて妙法蓮華經と云ふのである。

大强精進經に云く、衆生と如來と同共一法身にして、清淨妙、無比なるを妙法蓮

華經と稱す、

當體義鈔に云く、所詮妙法蓮華の當體とは法華經を信ずる日蓮が弟子檀那等の父母所生の肉身これなり

至理は名なし、聖人理を觀じて萬物に名を付る時、因果俱時不思議の一法これあり之を名けて妙法蓮華となす、此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減なし。之を修行するもの佛因佛果同時に之を得るなり、聖人此の法を師として修行覺道したまへば妙因妙果俱時に感得したまふが故に妙覺果滿の如來となりたまひしなり。

此理を詮する教へを名けて妙法蓮華經となす。

……日蓮上人の書

此の書から見るも如來祕密、神通之力の八字を感得、觀達なす時は妙法蓮華佛と化し得る事は明了である。即ち妙法（全理）を體現（蓮華）する事を宗として實行する事を法華宗と呼ぶのが、日蓮聖人の主義であります。釋迦牟尼佛は是れを理想として

濁惡の世の爲に說いて置いたのであると經文に今留て此に置くと云つてゐますから、私達は是れを受け持つのであります。けれども迷信化した日蓮宗にはなり度くない爲に私達は本尊を明了にして進まなければならない。私達は何を本尊即ち目的、信仰の對象として進んだら可いか。私は答へる妙法蓮華佛を中心に目掛けて妙法蓮華經の軌道を辿る事を信ずる。

第八章

では妙法蓮華佛とは何者ぞ、是の佛の化身佛は阿彌陀佛であり大日如來であり十方世界の無數の如來と呼ぶ凡ての如來は、妙法蓮華佛の化身である。是の妙法蓮華佛は久遠の無始の春より無終の永久の秋に至る迄で、不滅の姿を以て地上に實在をする人の姿のそれである、私達及び釋迦如來と云へども、人姿を離れる者ではない、釋迦一人が久成の如來ではない、佛の相も衆生の相も異ずとは無量義經の説であります、斯う云へば我々凡夫を、と云ふだらうが釋迦牟尼佛は久遠に佛格を得たとして、其れを與へたのは誰れか、や張り人生の惱と云ふ者が與へたのではないか、釋迦牟尼佛は矢張り敎への主として信ずるのが當然である、衆生をして我と異ならぬ樣にしたいと思ふ釋迦の金言である。してみたら、釋迦牟尼は先ず實化する前に信を置いたに違ひない。そうして衆生を尊敬した事は事實であらうと思ひます、釋迦牟尼佛とも云はれる

人が凡人の樣に人を奴隷視したり、凡俗視はしなかつた事と思ひます。九界は佛界に具し佛界は九界を體とするのであるから、佛と云へども私達人間と異る者ではない、此の自覺を充分にする處に溫和な三十二相が具すのであります、自高我慢をのぞこを故に此相を得る、と無量義經にあります。私は佛の經の因緣から思ふと衆生に平和と幸福を與へ樣として悟りの法を説れたのだと思ふ者であります。

此の意義から考へても互に妙法蓮華佛である事を考へなければならない。私達は死んでから急に佛視する必要はない、生きてゐる内に佛視してこそ價値あるのではあるまいか、死んだ人間を佛視してなんの價値があるのだらう、祖先崇拜は宗敎問題ではない、家庭の道德である。人が死んだからと云つて讀經して其の人の爲になるだらうか、生きてゐる内に成佛の出來ない人間が、死んだからと云つて急に精靈となる樣な事がない、若しなるとしたら、宗敎などは不必用な者である。けれども私達は死者を御佛として。信ずる事は出來ない、それよりも地上に同じ呼吸をしてゐる同類を佛視

する事を信ずるのであります。そうして生きた本尊は、妙法蓮華經の眞理を中心に集合する人の固い團結を本尊として供に養しなはんとするのである。なにも紙に書いた大曼荼羅を本尊として生命を歸依する事は出來ない是の紙木の曼荼羅は日蓮上人のお經の如く法華弘通の旗印である。其の旗印を目的としてなにが成し得られ樣か、形式の信仰時代は過ぎ去りました、時代は實踐の時である、夢の樣な十萬億土に歸依する樣な者がある以上は、私の云はんとする信敎は信じられないだらうとは思ふが、それは少數の人間でありますから、私は遠慮なく云ふが。日蓮の本尊は人本尊だの法本尊だのと云つても、それは夢の中の話の樣な者で、實生活になんの力を與へて呉れるであらうか、中には日蓮の信者でありながら眞言宗か天台宗と同じ信仰をしてゐる者が多くある、なにか日蓮を信じたら急に財産でも出來るかの樣に考へてゐる、財産としての利益はあるがそれは無上寶珠と云ふものであり、病氣には藥りとして精神力を與へて下さるでなく、自發さして下さる。それを知らないで何處からか持て來て下さる樣

に考へてゐる者が多いのでありましたが、今時はそんな人は尠なくなつた。是れからの世紀が眞に佛敎として、斯界の宗敎が羽を廣く開げて活躍する事が出來る樣になるであらうが、斯界を神が創造したなどゝ云つてゐる間は、倒底完全なる宗敎をも信仰をも實現をする者ではないと思ひます。けれども私達は生るが爲に法華經の說の儘を信じて、全世界に平和の曙光を見る事が出來ないにしても、我國全體が天の照光に浴さないにしても、私達は自分達だけでも可いから、其の平和の照光に浴したいと思ひます。どうせ始めから幾何百人と云ふ事は出來ないにしても、尠しの集合なり、體は離れてゐて百里の彼方に生活をしてゐやうとも、心は同じ峯を望んで進み行く、仲間を集めたいと思ふのであります、其の仲間は前に述べた樣に、妙法蓮華佛であるから妙法蓮華經と云ふ眞理を中心に把持して相互に崇拜して相ひ互に眞理化を敎授しあつて、共生を辿りたい、其の努力は經文の如く僞りのない一心欲見佛、不自惜身命で相互が本佛と見合ふのであるから、他人の缺點を見ない樣に、若し眼に付いたとしたら

身命に訴へても眞に化す樣に全能的行動を持て敎授感化に勤める事を持たなければならない、それが現代の人の讀經供養であると思ひます、怎麼人間でも慈悲と尊敬を持て感化したら出來ない事はない。

鬼神も泣かするものは世の中の
人の心の眞となりけり

是れも明治天皇の御歌であります、眞心とは慈悲と尊敬を持て人に接する心持である。人を盜人視したり惡人罪人視するのは、仰も信仰の根本義を失つてゐる者であります、故に私達が生活の安定を求め樣と云ふ心持は、眞理化の心念であります、其の安定を金に女に物に求め樣として自己に求め樣としないから。其の處に爭鬪があるのですから、他人の安定は自己に求め樣とするのみならず、他人の安定をも自己に求め樣とする力、即ち佛力でありましやう、佛の又の名を自覺他覺と云つて自から覺ると同時に他人をも覺らそうとする事でありますから、自他の生活の安定を自己に求め樣

とする心情が信力と云ふのであらう、信仰を口にしながら、他人を輕視したり、惡口云つたりするのは、法に謗いてゐる者であります、當に起つて遠くより迎へて、佛を敬ふ樣にすべし、と云ふのが、法華法であります、眞理を把持する者も、把持せぬ者も問はず、人間なる以上は誰れも平和と幸福なる人生を迫りたいと、考へてゐない者はないのであるから。私達は相互に崇拜をしなければならない、まして眞理化をなしつゝある者はなをさら尊敬しなければならない、此の尊敬は彼をして眞理體驗の補助となるのである、それを何んだ文明時代に信仰なんぞと、云ふ迷信やがあるが、文明とか文化とかは云はずと知れた眞理化ではありませんか、文は法である、化は華である、文化生活とは法華生活である、けれども社會に流れてゐる文化は紊化であつて文化ではない。眞の文化と云ふ者は貧富の差なく實行の出來る者でなければならない、今の文化は富の文化であつて人の文化ではない、だから文化と云ふ名詞の元に、犯罪者と不幸者が多く出來て、結局人生に惱みを增す樣な事に成つ了つてゐる。私達は是

んな事を人の求めんとする生活の幸福だとは思えない、それよりも自受法樂の眞の文化を求め様とする者である、其の要求の光りは法華經を照したのである、法華の光明は二度人生を照された、其の交る光りの中に抱れて人生を辿る時、其の處には凡ての惱みは守護する神の様に光明を放ちて戰友と成るのである。須彌山に近ずく鳥は金色と成る、眞理體現者の前には苦惱は化して守護神と成る。

大六天魔王は法華行者の守護神なり、

とは日蓮上人の金言であります、佛に成らうとする者の眼には惡魔はない。敵持者は名將にあらずで、三界皆な我有なりと云ば、善も惡も美も醜もそれは我身の一部ではないでしやうか。私達は一日を辿るに十方三世の諸佛菩薩に抱かれ取り卷れて生活をしてゐる、其の溫厚な事と云つたら、譬へ様がない、是れ一重に自己の信光の故であり、妙法のなす處であると思ひます。社會生活がその處迄で行かずとも、一日の勞を得て家庭の人と成る時、此の溫浴に浴する時わ手足の疲勞は一時に去つて、日蓮上

人の金言の如く

夫婦さし向へて一こんの酒を片むけべし、

是れ妙法蓮華佛の當體即現の自受法樂ではあるまいか。天人にも譬へられ様、子供は双方から首にしがみ付いて、慈愛を檀まゝに吸をうとする、其の叫びは天人常充滿と云ふのは斯した様ではあるまいか、此の氣分を持て晝の事業をなす時、一に自己の生活の保障を持ち、二にそうした作品は他人の氣分を滿足させるに足る品は出來るのみならず、製產能率は氣分にある事ば誰れも知る處である。名人は氣分に生きて氣分に依つて創作をするから、名作は出來るのであります、ですから製產者の氣分を害さぬと云ふ事は、製產能率を揚げる第一條件であります。此の條件は信仰の全部と云つても可いのであります、此の信仰の元に業務をなすを佛敎では諸作佛事と云つてゐます。佛心を持て爲てこそ諸作佛事である。其の佛心とは前に述べた僞りのない、三義の含まれた信仰を持て他人即ち妙法蓮華佛を供養するの有り様であります。互に

是の信念を持た時、地上は佛界化すのであります、けれども吾人としては此の信仰を持た時斯界は佛界化されてゐますが、他人の眼には矢張り穢土であり惡魔の世界の樣に感じられてゐるかも知れません、若し斯界を惡魔の世界か穢土や瓦の世界と觀じてゐる人は、生きてゐると云ふ事を呪つてゐるであらう、生を呪へば必ず產の親を恨んでゐるに違いない、親さえ私を產んで呉れなかつたらと、呪ふ樣に成る、此んな信念を持たら獨身で滅する事を要求してゐるであらう、そうして早く死ぬ者を幸福者よ、罪なき者よ、と讃美してゐるに違いない、其れ程には思はないと云へば、他土の崇拜者ではない、天國に生れるを喜ぶ人ではないのです。他土の宗敎崇拜者は皆親を呪つてゐるはずである、そうして戀愛や結婚を惡魔の始めと思つてゐる筈である。親を眞から尊敬し祖先を信敬戀慕し、子孫を慈愛する者は斯界の宗敎信者より外にない筈である、斯界の宗敎は西方の宗敎でもなければ、南方の宗敎でもない天國の宗敎では元よりない、天地開闢より今日に至る迄、斯界を中心に明了に說明した宗敎は、法華

經の外にないと云ふ事を斷言する。法華經では此の地上を常寂光土と呼んでゐる、そうして地上の人類を妙法蓮華佛と呼んでゐます、若し天地開闢があつたとして其れから今日迄で滅した事がない、吾人的には滅してゐるが、全體としては滅してゐない滅は自己が他を見た時の樣である、自己にしても滅は想像に過ぎない。私は是の意味に於て妙法蓮華佛の實在を叫ぶ者であります、そうして其の妙法蓮華佛に妙法蓮華經と私のなす事を供養したいと努力する者であります、否、否、法華を宗とする者は、皆なさう云ふ信急の元に活動してゐる者と信じます。

妙法蓮華佛の實在を說くにしても、十方佛及諸佛の實在を說くにしても、人間を離れて說明する事は出來ない。日蓮上人は

敎主釋尊の出世の本懷は、人の振舞にて候ひけるぞ。

と云つてゐます、人たるべき者があればこそ、佛、神も成る者である。人なくして神なり佛なりがあつて、何んの役になるだらう、凡ては人間があつての問題でしやう

處で人間が實在してゐる事は、廣義の上に於て誰れも認める事は出來ると思ひます、けれども吾人々々としては一分間の實在をも認める事は出來ませんが、人類と云ふ詞の上に認める事は出來るでしやう。若し人間が實在をするとしたら其の人間の創造した神と云ふ理想の人物も從つて實在であると云へます。一歩進んで私達の思想は實在であります、けれども其實在不滅は人間の信念に依つて維持される者であります、ですから信念が眞實なる實在の都であります、以何なる者でも信念なくして存在はない神も佛も自分も他人も皆信念の上にのみ實在をしてゐるのであります。信念のない人間はないが、一信念を增長させる人と信念の沒不沒する人がありますので、此處に於て信疑の差が生じます。此の信疑の二字が聖と凡、悟りと迷ひ、强者と弱者とを生むのであります。信念の弱い人間が生存の活命を失つてゐる者であります。强者にならんとするか、聖き人とならんか、迷いから醒めんとするか、以上の者になりたいと思ふには、怎しても信念を增長させなければなりませんけれども信念は夢の中では增長

する者でなくして事實の世界に於て成長する者であります。信念は現實の世界に於て成長する者である以上は、實行の間に增長する者であります。ですから信念は實行にうつたへなければ、認める事が出來ません、それを理窟や理論や机上で信念を養しなをうとしても、それは信念に非ずして一部の自信に過ぎませんが、いよ〳〵事實となつた時は多く破壞される者が多いのであります。何故かと云ふに他自信情から受けた信念でないからであります。

其處で私達は幾何萬年と經驗されて來た、他人の信念と、即ち先覺者の信念の表れ言換へれば宗教と云つても可いが、其の信念と吾人の覺信とを交じえた、信念を以つて生きんとする力を養しなはなければなりません。

其の信念に依つて活躍される者は、前に述べた如來秘密神通之力の努力であります

此の力が私達の此の體に存在をしてゐると云ふ事を信じて、此の如來樣を呼び出さなければならない、又呼びながら業務に從事する時、我が如來は光明を放ちて來るの

である、

戀慕するが故に出て爲に法(生路)を說く。

と云つてあります、戀慕は信念でありますが、其の時にこそ我身が妙法蓮華佛である事を認識する事が出來ます。是れは私の詞ではない日蓮上人が佐渡の阿佛坊に送られた手紙の敎書であります。是の信念を本旨として進まなければならない日蓮宗の信徒は法としての妙法蓮華經を本尊とし、人としての佛體を本尊としたり、大自然を本尊としたりとしたり、してゐますが、そんな者が日蓮宗の宗旨ではありません、卽ち妙法蓮華經の眞理を受け持ちて成佛する事、そうして他人にも受けさせ維持さして法化せんとする努力が、我國情化された信敎である、それをドン／＼チヤキ／＼ポン／＼バタやつて南無妙法蓮華經を唱鳴てゐるが、それでは明らかなる事日に勝る者やある、我國を日の本と名付け、淸淨なる事は蓮すに過ぎる者やある、蓮長は日蓮と名乘ると云つて、國家を救ひ、臣民を助け、我神州の天業と先明を持つて西方を救はんとした、

祖師の御後を慕ひ戀する者とは思えません。先ず彼等はさて置いて、眞實生きんとする者は、自己に實踐して後に其の行爲を持つて彼の胸の戸を開かん事を、

斯く私達が遠く離れてゐても、互に見ず知らずとも、實行する處に爭鬪からでない平和を呼ぶ事が出來ます。斯の信行が斯の世界の宗敎であり、私達に新しい活力の生命を得る宗旨であると信じます。私達が此の活命を得る事は國體に魂を入れ、國家に人住む如くであると思ひます、殊に二千五百餘十年の永き我國體は、信仰の二字に於て今日迄で進んで來た事は事實でありましやう。信仰ではなく忠孝の二字だと云ふでしやうが、忠孝は、君を君と仰め親を親と信ずればこそ、忠も孝も出きた者である、君親に忠孝をなすには、此の世界に生れた事を呪ふ樣では忠孝をする事は出來ない、君親に信仰を置かない者は一に過激思想の如き、一方に不良少年の如きはそれであります、彼等は物に徹でも寄生する樣に、此の世界に生れたと思つてゐる、其う信ずる者は可いのだ、生み形けられた事を迷惑に思つてゐる。其の彼等に怎うして生

存の喜があらうか、

親に對する生存の喜び
君に對する生活の喜び

此の法悅が忠もなせば孝もなすのであります、其の喜びは先ず目を開らかなければなりません。即ち人生と云ふ問題を明了にしなければ、生活も生存もに對して歡喜が出來る者ではありますまい。其の人生を說いた者が人の宗敎であると信じます。

人の生きて行く方法を明了にする者が眞の人生觀だと思ひます、誰れも人生觀は論じて居ますが、自己的な人生觀では人をして惱ます樣な事を生み出して了ふのであります。人間が獨りで生活をしてゐる者でない以上は、己人的に考へるのは大變な間違ひであります。團體的生活をしてゐる以上は、全人類と云ふ上に於て人生觀を考へるのが當然であると思ひます。處が自己の人生觀を以て妻も子も隣人も同類も悉く我觀中に入れて判斷をしやうとする、だから我觀外の者を惡人と呼ぶ樣になるのであ

る、既成宗敎には多く我觀宗敎が多いのであります、ですから彌陀一佛の判斷を以て全世界を支配しやうとしたり、キリスト一人の思想を持つて全世界を家族化さうとしてゐたり。する樣にしてゐるが是れは統一でなくして散亂である。統一と云ふのは全部が一に向つた時が統一であります、此の統一の觀方を間違ひてゐる者が既成宗敎中には可也あります。私達は既成宗敎が怎うあらうとも、全人類なり國民が眞の幸福と平和とを求めんとする爲には、とらわれてゐる事は出來ません、が、全然既成宗敎を投げる必要はありません。では怎うすれば可いか、

捨ずに活す方法こそ人のなすべき事がらだと信じます。

私は日蓮上人の信仰を其の儘にと申上たいのでありますが、それでは六百餘年の差がありますから、現代から日蓮上人を迎へて各宗にとらわれなかつたと同時に、各宗の神佛に◎命を與へた獨立と抱擁に富む日蓮上人の理想を實現せんとするのであります。日蓮上人は現在の宗門內の人達の騷いでゐる樣な薄べらなお方ではながい。時代

から考へても知れる通り生るか死ぬかの問題に惱み疲れた、時代人に活命を與へて、國體に魂を入れ樣としたのであります。其の師の詞や理想を今現實に表現しやうとしてこそ。生命ある者だと信じます、けれども僧侶達はあまりに日蓮上人を人形か木像の樣に思ひ過ぎてゐるあやまりがあります、それが爲に、他の世界の宗敎と同じ樣に箱入れにしやうとしてゐます、日蓮上人は橘が好きであつたが樒ではない。箱に入れるのは送り物か死人計りである、私達はあらゆる聖人、あらゆる神佛を地上に迎へて斯界をして常寂光土にしなければならない、運命の期にあるのであります。故に皆さんのお手に是の書をお送りして、皆さんの御はんだんを頂戴したいと思ひます。

是れが私達の本尊であつて兩方のは自覺及他人をして信ずる方便であると私は信じます。日常幾萬の妙法蓮華佛に抱かれてゐる私は幸福です、其の妙法蓮華佛を信じます。皆さんに向つて讀經供養として此の書のペンを置きます。

さらば　皆さん賛不賛の御返事を、お待申して居ります。

二千五百八十五年十月十一日——終り。

大正十四年十一月廿七日印刷
大正十四年十二月一日發行
大正十四年十二月十日再版

〔定價金參拾錢〕

著者　小島勝光

發行者　大阪市西成區粉濱町二一九　聖活社書籍部
代表者　今村豊三

印刷者　大阪市南區鰻谷仲之町三九　岡本省三

印刷所　大阪市南區鰻谷仲之町三九　合資會社　中村盛文堂

發賣所　大阪市西成區粉濱町三三五　聖活社書籍販賣部
主任　守山德太郎
振替大阪六六六一七

不許複製

信仰的正義ヲ本意トシ
親切丁寧ヲ以テ薄利ニ
御取扱申上候
此本御愛讀ノ方樣ハ特
ニ御相談ニ應ズベク候

建築設計製圖並ニ請負
合資會社
渡邊工務所
主所
(渡邊藤太郎)
大阪市南區大和町二十番地
電話南四五參五番

洋酒·食料品
卸小賣

合名會社
田染商店
大阪市南區長堀橋筋二丁目十五（日本橋北詰北入東側）
電話特南（五七八七番 四四〇〇番）

辯護士 法學士
佐川潔
大阪市西區靱下通三丁目（信濃橋停留所西ノ辻北へ入西側）
電話土佐堀四八五三番

辯護士
川村角治
大阪市南區大寶寺町仲之町
電話南七一二九

鍼治小兒專門
岸和田市野田町
正惠堂醫院
信仰的生命を以て立たるゝ鍼治の名醫吉田先生が直接療治せらる

小兒かんむしの特効劑
家傳 立効丸
一服 二十錢
百粒 八十錢
大阪府岸和田市野田町
(女學校前)
ヨシヱ事
製劑本舗 吉田鍼療院

各種地下足袋卸問屋
富貴足袋
ニコニコ足袋 本舗
澤田儀平商店
大阪東區唐物町四丁目
電話船場四六九〇番
振替大阪三八五一番

297
16

土木
建築
請負

前田組

大阪市港區市岡高尾町
前田芳吉
電話西一七三〇

終